青年と犬と、もう一人

Schuld

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青年と犬と、もう一人

【Ｎコード】

Ｎ５７４７Ｚ

【作者名】

Ｓｃｈｕｌｄ

【あらすじ】

世界はある日を境に姿を変えた。正気を失った死体が、生者を襲い貪り尽くす世界に……。これは、そんな世界でたった一人、装甲化したキャンピングカーで一頭の犬と各地を放浪する一人の青年の物語。

主人公＞私＜と犬のカノンが日本各地を物資を求めてただ彷徨く短編連作式の物語です。一応オチはしっかりとあります。

感想をいただけると作者が喜びます。また、訂正や誤字の報告などもお待ちしております。それと、お国自慢的な事をしていただけるとその地方が舞台になったりするかも知れません。

青年と犬と亡骸（前書き）

微々たるモノですが、具体的な身体破壊描写が御座います。苦手な方は戻って下さい。

同名の物を一度投稿しましたが、間違って短編設定にしておりましたので連載にして投稿をやり直しました。そちらをお気に入り登録し、ポイントを投稿して下さった方には本当に申し訳ありません。もしもよろしければ、此方の方をご覧下さい。

青年と犬と亡骸

広大な森があった。密集して林立する樹木が月の光を阻む明かり一つ無い深い森だ。

その中に一台のキャンピングカーが止まっている。運転席と後部居住区が一体化した小型のキャンピングカーで、森の中に鎮座していることからキャンプの最中と見える。

だが、そのキャンピングカーは少々以上に異質であった。元は青かった地金を覗かせている側面には、追加の鉄板が荒っぽく溶接され、その上には更に頑強性を増すかのように細い鉄パイプが何本も張り付けられている。

また、全ての窓に鉄格子が二枚重ねで貼られ、どうやってもウィンドウには外から触れられないようになっていた。

それだけではない、足回りには横から何かが飛び込んでもタイヤに当たらないよう鈑金でスカートが溶接され、前面には障害物を蹴散らすためのドーザーが装備されている。

まるで動く要塞のようなキャンピングカーであった。天井には無数のポリタンクや円形の車上用ガソリンタンクが括り付けられており、設けられた天窓から明かりが少し漏れていた。

明かりの源、キャンピングカーの中には生物が二つ居た。落ち着いたクリーム色の壁紙と木目調の枠を基調にした内装のそこに居るのは、手足のある二足歩行の生物と、四つ足で動く分厚い毛布を纏った生き物だった。

人間と犬である。気楽そうな黒いスェットを纏った矮躯の青年が運転席側に備え付けられた白のソファーに腰掛けて、ソファーの前に置かれている硝子のローテーブルの机上に並んだ物を手入れし、その足下で大きな犬が寝そべっている。

青年の年の頃は二十の頭、ようやく少年から青年へと呼ばれるようになったという辺りであり、足下で寝そべるのは堂々たる艶やかな毛並みを有した雌のシベリアンハスキーだった。一人と一頭は天井のフックから吊したオイルランタンの仄かな明かりに照らされながら夜を過ごしている。

キャンピングカーの中で寄り添う人と犬というのは実に絵になる情景であるのだろうが、実際は趣が大きく違った。

理由は複数存在するが、大きな理由の一つは青年が手入れする机上の物品である。

銃だった。形式は様々であれど、それらは全て銃である。短機関銃があり拳銃があり散弾銃がある。この光景がアメリカであるのならば、単なる犬と一緒に狩りに来た物好きな青年の絵なのであろうが、この場所は日本、それも長野のスキー場が近い只の山中であったのだ。

日本では原則銃の所有は許可されておらず、許可を受けてもその制限は大きい。散弾銃だけならまだしも、短機関銃や拳銃……それも、警察官や自衛隊員が持つような物はまかり間違っても民間人が持てようはずが無いのである。

無論、格好もあるのだが青年がそれらを所持する事を許された組

織に所属しているとは思いがたく、また仮にそうであったとしてもこのような場所で開けっぴろげに整備することなどあり得ないだろう。

だが、机上に置かれているそれらは確かに銃であった。銃口の先端に細長い減音機を備えるＭＰ５Ｊに、五発の弾丸が収まるリボルバーのニューナンブ、どちらも警察が採用している銃であった。前者は特殊部隊でもなければ持っていないが、前者は警邏の警察官が装備している物だ。

クリーニングロッドに装着されたぼろ切れでフィールドストリッピングされたＭＰ５Ｊの銃口の内部を拭うと、確かに使用した証拠である火薬滓が付着している。その後可動部を拭ってオイルを指し直し、稼働が滑らかである事を確かめると再び組み上げて結合を確かめる。意志無き鉄の暴威は青年の小さな手の中で有り有りとその凶悪性を示していた……。

傍らに転がる鈍い光を放つ弾丸から、それがモデルガンであることは否定された。

確かにダミーカートを装填出来るリアルな物は存在するが、これらには玩具には本物の凄味や圧迫感があった。引き金にたった数キログラムの力を掛けるだけで人を殺せる圧倒的な暴力の凄味が。

多数の銃を淡々と分解し、組み上げて行く青年の横には無数の木箱や鉄の塊が転がっている。さして広くもない居住区の後部、システムバスへ続く扉の付近に転がるそれはワインの瓶やキャンプのための食材を納めた物では無い。

箱の内部は釘で封じられていたり、しっかりと蓋がされているの

で中は伺えないが、少なくともキャンピングカーの中に転がっている風情の物では無かった。

その内部には梱包材として大鋸屑が詰め込まれ、幾つもの拳銃が収まっていたり、別の物には弾丸が詰まった紙箱が隙間無くキッチリと並んでいる。また、ある物にはピンの付いたボール……手榴弾が納められていた。

そうして、それらの火薬が詰まった木箱に立てかけられているのは、強化プラスチックと鉄で構成された小銃……自衛隊で採用されている89式小銃であった。

全てキャンピングカーではなく、物資輸送の軍用トラックにでも積んであるのが似合いの物だ。何故それがこんな所にあるのかというと……。

不意に、伏せられていた犬の耳が立ち上がり、その身を擡げて周囲を軽く見回した後で青年へと鼻面を向けた。蒼と金のオッドアイが青年のつり上がった無機質な瞳を静かに見つめている。

視線を受けて、青年はハスキーの頭を一撫でしてから、たった今分解整備を済ませたニューナンブのシリンダーにフルムーンクリップで弾丸を五発装填した。スイングアウトタイプのシリンダーを手首のステップだけで戻すと、セーフティーを外して撃鉄を引き上げる。

そして、大儀そうに立ち上がると運転席の方へと足を向けた。運転席は狭い小型のキャンピングカーなので居住区と連結されており、ほんの少しの空隙を繋ぎにして設けられている。また、その繋ぎにも数個の木箱が置かれており、身体を横に倒して何とか通れる程の

スペースしかなかった。

運転席、フロントウィンドウにもサイドウィンドウにも頑丈な鉄格子を二枚重ねで備えたそこは、まるでトーチカの様な風情であった。ふと見ればダッシュボードの上には小型のアマチュア無線とナイフが無造作に放置されていた。

青年が拳銃を片手に森の奥、ただ深い闇を湛えた空隙を覗き込む。密集した木々の間には何も見えない、ただただ深い闇を湛えて沈黙が横たわっているだけだ。

だが、耳を澄ませていると小さな音が聞こえてきた。枝を踏み折る人間の足音であった。獣にしては音が大きすぎるし乱雑だ。

普通ならば、これだけ物騒な物を持っていてもここまで警戒はすまい。日本で彼と同程度の武装をしているのは警察か自衛官、駐留米軍程度の物であり、彼等が包囲を知らせもせずに接近してくると言う事はまず無い。

しかし、無表情を保ったままグリップを強く握る青年の右手の掌には、嫌な汗がじんわりと滲んでいた。

指は万一の事があっても暴発しないようにトリガーガードへしっかり伸ばして添えられているが、何時でも動かせるようにと僅かにだが下へと動いていた。

青年の射殺すような視線が注がれる中、足音はゆっくりと闇の中から全貌を見せずに此方へ近づいてくる。次第に枝を踏み折り、落ち葉を蹴る音が大きくなり、増えてきた。おおざっぱな感覚だが十数人の人間が森の中に居るようだ。

いよいよか、と青年は運転席を辞して居住区に戻ると、天井に手を伸ばした。急いで据え付けたような、整った内装に似合わぬ乱雑な折りたたみ梯子を下ろし、ランタンを手に取って、これまた急拵えの雑な天窓から身を乗り出して車上へと出た。

冬の冷えた空気が暖かな室内で温もっていた体を撫でながら抜けていき、吐き出した息が白い煙となって立ち上る。冬の森は真円の月の白々とした光と相まって酷く冷える。

それでも青年は動じずに白い息を吐き出しながら音の来る方へとランタンを高く掲げ、銃口を向ける。

そのまま暫くの時間が過ぎた。数秒か、あるいは数分か、どちらにせよ青年には長く感じる時間の後……耳朶を不快な低い声が打った。

それは唸り声であった。腹の底から捻り出したような恨みがましい声、聞くだけで総毛立つ気味の悪い響き……。

来た、頭の中で思いながら青年はグリップを保持する力を強め、ランタンをより高く、腕よ伸びよと言わんばかりに掲げる。

それは木々の間、濃密な煮詰めたような闇から這いだしてきた。二本の足で直立し、胴体があって腕が有り、首の上に頭が乗っているそれは人間だった。

しかし、人間と特徴は全く同じであるが、それをどうして人間と言えようか……。

目は白く濁り、口は唇を失ったようにめくれ上がって血塗れの歯茎と黄色く染まった歯を覗かせ、皮膚が腐り落ち、肉と骨を露出させ、虫をまとわりつかせた腕がだらりと力なく前に突き出されている。

身に纏う衣服は酸化して黒く変色した血で染まり、所々破けて内部を覗かせている。

普通ならば歩くこともままならない致命傷等というようなレベルではなく、腐ったその肉体は既に死んでいなければおかしい状態なのだ。

だが、彼等は歩いている。大人も子供も女も男も、肉体を腐らせ一部を失いながらも未だに活動を続けている。どう考えても正気は失っているが、それでもなお動いているのだ……。

青年は続々と出てくる死体の群れの先頭、腹から腐った臓物を大量に零した男の額に拳銃を向けた。その目は狙いを付けるために細められているが、別に気負った風でも特別何かの感情が宿っているようにも見えない。

ただ、青年は静かに拳銃の引き金を絞った……。

乾いた、一般人が銃声に抱くイメージよりもずっと小さくて陳腐な音が夜の森に響いた。

次の瞬間には先頭の男の頭が弾けたように背後へと傾ぎ、そのままゆっくりと倒れて行く。

弾は虚空を迷い無く直進し、音の速さで男の額へと飛び込んでい

たのだ。よく観察すれば男の額には小さな穴が空き、後頭部は大きく抉れ飛んでいるのが見えただろう。

そして、背後を歩く子供の顔面に男の後頭部から抜け出した弾丸が巻き込んでぶちまけた腐れた血や脳漿がかかっていた。口の付近にかかったそれを、千切れかけた舌で名娶りながらこちらへと進んでくる。

二度、三度と続けて青年はトリガーを引き絞り、そのたびに連中の頭が傾いで仰向けに倒れていった。如何に３８スペシャルが小口径であろうとも、その衝撃は強く殴られたの等しい。弾丸が頭蓋を砕き、腐った内容物を撒き散らしながら背後へと抜けていく。

それでも、誰一人足を止めることは無い。白痴の如く足を前に動かし、意味の無い呻きを上げて青年へと手を伸ばす。そして、最後には額に弾丸をねじ込まれて背後へと倒れ臥すのだ。

最終的に、キャンピングカーの前に倒れた連中……いや、死体の数は１８を数えた。中々洒落にならない数だ。五発しか弾丸が込められないニューナンブなのでフルムーンクリップでのリロードを四回挟んでようやっと全てを始末出来たのだ。既にシリンダーの中には弾丸が二発しか残されていない。

連中の動きは鈍重であったが、それでも一発たりとも外さずに額へと叩き込んだ青年の力量は賞賛に値しよう。人間の頭部は一歩を踏み出す毎に左右へ揺れるので大変当てにくいのである。

だが、それを誇る事も無く青年はシリンダーをスイングアウトさせ、掌の上に弾を開ける。熱を持った薬莢三つを天窓から中に投げ捨て、残った弾丸二つをスウェットのポケットへとねじ込んで、代

わりに最後のフルムーンクリップを取り出して装填する。

死体を睥睨する目に、感情の色が煌めくことは無い。ただ、濁ったドブのような暗い光が停滞したようにある。青年は暫しそれらを眺めると、嘆息してキャンピングカーの中へと戻った。

梯子を下り、粗雑な蝶番が露出している天窓を閉じて梯子を畳む。冷えた身体が温かい場所に戻り、熱を取り戻そうと震える生理反応を得た後で青年がふと足下を見ると、ハスキーが心配するように此方を見上げていた。

「大丈夫だ、カノン」

ランタンを天井のフックに戻しながら、青年は足下の雌犬を見下ろして言った。

カノン、そう呼ばれた雌のシベリアンハスキーは吠えもせず、だらんと垂れた青年の左手を軽く舐め、定位置であるソファーへと戻っていく。青年もリボルバーをソファーの上へと乱雑に放り投げると備え付けの寝台、そのベッドサイドに置かれている濡れティッシュを一枚引き出して手を拭った。火薬が目に入ると目が潰れる事があるから撃った後は気を遣わなくてはならない。

ふと、手元の時計に目を見やると時刻は十二時を疾うに過ぎていた。そろそろ短針が2の数字に重なりかかっている。

「カノン、寝よう。ここにも増えてきたから明日には移動したい」

青年は言いながら寝台のカバーを外して小さく畳み、ランタンの明かりを落とした。代わりにベッドサイドに置いてある電池で動く

ランタンのスイッチを入れ、ごく小さな灯りを灯した。

矮躯であっても若干窮屈なそこに身を横たえて毛布二枚、掛け布団一枚の重装備に身を沈める。そうするとカノンが起き上がって足下へと飛び乗って来る。流石に狭くて重いが、温かいのでイーブンという事で我慢するとしよう。

安い蕎麦殻の枕に顔を埋めると、硬い感触があった。眠っていても直ぐに武器を取り出せるようにと枕下に一挺の拳銃、日本の警察官が持っているＳ＆Ｗ　Ｍ３６０ＳＡＫＵＲＡを敷いているのだ。

ニューナンブと似たような形状で、同口径、そして同じく五発の装填数も全く同じだが、此方の方がやや小型で重量も軽いのだ。そして撃鉄が小型故にブレが少なくて狙いやすいので青年も大変気に入っていた。

冷えていた布団にじんわりと熱が移り、下半身に重なるように寝転がるカノンの暖かさも伝播してきている。緩やかに伝わる暖かさに身を任せ、青年は静かに目を閉じた。

ただ、外から仄かに漂ってくる腐臭さえなければなと思いながら……。

青年と犬と亡骸（後書き）

適当に続くとは思いますが、宜しくお願いします。

後、本業が忙しいので更新は然程早くないと思います。

もしよろしければ感想や訂正などお待ちしています。気になる物がありましたら、後書きにて返信させていただきます故。

青年と犬と寒い朝（前書き）

遅くなりましたが続きです。やっぱりグロい所が少し……と、言うよりも殆どですね。苦手ならお止め下さい。乏しい文章力ですが、万一気分が悪くなるとよくありませんので。

青年と犬と寒い朝

懐で何かが震えるのを感じて、青年は目をそっと開いた。

寝起きでぼやけた視界には、シーツと枕の白で埋まっており、横向きで枕に顔を埋めるような体勢で寝ていたのだなと気付く。

懐で震えているのはアラームに設定して、時刻が来たら震えるようにした携帯電話だ。目覚ましとしては音が鳴らないのが妙であるが、青年は音は出したくないが故のバイブ設定だった。

もぞりと蒲団から這い出て足下を見ると、目覚めたのを確認するようにカノンが頭を擡げて青年を見つめていた。おはようと言いつつ、体全体を蒲団から引き抜くと、朝の冷え切った空気に身が震える。もっと暖かい服に着替えなくては。

その前に、部屋の後部に積んである木箱、それらの群れの中に埋もれるようにして置かれている段ボール箱を開いた。中には水の2Lペットボトルが6本詰め込まれいる。市販品の何処にでもあるミネラルウォーターであった。

その内の一本を取りだして蓋を捻り、手近にあったケトルの中に注ぎ込み、その後で大きく一口含んで、軽く口腔内を濯いでからキッチンのシンクへと吐き出す。僅かに濁り、泡だった水が排水溝へと流れて消えていく。寝起きなので口臭が気になり濯いだが、水だけでは気休めにしからならない。

部屋全体が寒いので水自体も冷えているから酷く歯茎に凍みる。かといって態々暖めるのも勿体ない。忌々しげに青年は下で歯茎を

撫でて、冷たさを少しでも緩和させようとしていた。

ケトルに水は注いでも、まだ湯は沸かさない。と、言うよりも沸かせない。普通の家と違って、ここには電気もガスも通っていないのだから。

狭いながらもベッド、キッチン、シャワーにソファーとテーブルが詰まった部屋を眺め、青年は適当に服を着替える。前日の内に寝間着は枕元に用意してあるので、焦ることはない。寝間着であるゆったりとしたスェットを脱ぎ捨てて、普段着へと衣服を改める。

普通のボクサーパンツと化学繊維で編まれた保温性の高いインナー。それから黒いカッターシャツを着込み、同じく黒いスラックスを履く。そして、ベルトを締めて上から軽くベストを羽織ると着替えは完了だ。

上から下まで真っ黒な姿は喪服を思わせる。これにジャケットを羽織ってネクタイを締めれば、シャツの色さえ無視すればもう葬儀の参列者にしか見えはしない。

着替えた後で、青年はシンクの前にかけられた鏡を覗き込んで己の顔を検める。普段と変わらない景気の悪い仏頂面が映り込んでいた。

緩くつり上がった目つきの悪い目に、高く低くも無い鼻と薄い唇。顔色は蒼白に近く、面長な輪郭を彩る頭髪は烏の濡れ羽色をして艶やかだが、自分で刈り取ったかのような散切り頭だ。

派手でも無く地味でも無く、特別に列挙するような特徴も無い。一般大衆の中に埋没する目立たない男がそこに居た。

昨日使ったのと同じウェットティッシュを引き出し、目やになどを拭うと、青年はもう用も無いとでも言うように鏡に背を向けた。元々外見には大雑把な気質であるのか、青年は自分の顔など、出来れば一秒たりとも見ていたくないという性質でもあったが、それにしても適当に過ぎる。

が、これはある意味仕方が無いだろう。何せ、外見を気にして接しないとならないような相手は居ないのだから。

次に向かったのは天窓だ。梯子を下ろして天窓を押し上げ、キャンピングカーの天井へと出る。

暖かい服装をしているので昨日よりは少々マシだが、それでも冬の長野は冷える。１２月も近いのでそろそろ雪も積もり始めるだろう頃だ。

見上げた空は抜けるように蒼く、どこまでも高い。雲一つ無い青が、眺める青年を酷く薄ら寒い気分にさせた。まるで、地を這うしか出来ない自分をあざ笑っているかのような、いっそ皮肉なまでの爽やかさだった。

天気は良い、視界も良い、問題は何も無いなと確認すると、青年はぐるりと車の周囲を見回す。昨夜と同じく死体が無数に転がっていた。その数を数えると、一八体……昨夜と同じであった。

普通ならば死体の数を気にする必要などないだろう、死体は動かないというのが相場なのだから。だが、相場というのは常に変動する物でもあるのだ。

青年は死体を注意深く観察して、ピクリとも動かないことを確認すると、更に遠くを見回し続ける。木々が密集しているので、そう遠くまでは見えないが、夜と違って明るいので比較的よく様子が観察できた。

冬でも尚青々と茂る常緑樹の林の間には何もおらず、地面にはただ飛ばされてきた落葉が敷き詰められていた。遠くで何かが動く目立った音も全く聞こえない。

希に鳥の鳴き声や、木から飛び立つ時の羽ばたき。小動物が駆け回っているであろう音しか聞こえない。自然の音を除けば、そこは全く持って静かであった。

とりあえずは安全か、と青年は吐息して中へと引き返した。そして、木箱に立てかけてある鉄と木の混合物……散弾銃を手に取った。

モスバーグをベースに改造……国内法に沿うようにダウングレードされた猟銃であり、１２ゲージショットシェルが三発だけ装填できる、外見もこれぞ猟銃というような銃だった。マットブラックに塗装された本体に、ストック部分にベルクトテープで捲いて装着された弾丸ポシェット。ちょっとした狩りに持って行くような風情だ。

散弾銃が立てかけてあった木箱は三つ積み上げられた青年の腰元ほどの高さがある物で、その一番上の箱は蓋が外されていた。

木箱の中には、色とりどりの紙箱が規則正しく詰まっている。それらは、様々な規格の弾丸のカートンだった。

その中から箱を一つ選んで取り出す。蓋を開けると赤い本体と金色のプライマーが見えるショットシェルが整然と等間隔で並べられ

ていた。まず三発取り出して猟銃に装填し、一掴みをズボンのポケットへとねじ込んだ。

ポシェットにしまうよりも、こっちの方が取り出し易いのでポケットにしまったが、本当は危険なので止めた方がいいのだろう。だが、装填が素早く出来ないのは少々のリスクよりも危険だ。そこには目を瞑るとしよう。

手と、ポケットの中に確かな重さを感じながら、散弾銃の安全装置を外してキャンピングカー居住区側の扉へと向かう。まだベッドの上にいるカノンには付いてこないように手で制しておいた。

付いてこようと身を起こしかけていた所なので、不満そうに小さく鼻を鳴らしたが、決して鳴きはしない。青年が音を立てるのを好まないことを良く理解している、賢い良い犬だ。

鍵を外して慎重に、かつ静かにに外開きの扉を少しだけ開き、さっと身を外に躍らせた。出ると同時に扉を後ろ手で閉め、散弾銃の銃口で周囲をなぞるように眺めた。

……何も居ない。また、近くで動く物も無い。極めて静かな物だった。

小さく口の中でクリア、と自分に言い聞かせるように呟いて、青年は散弾銃を油断無く腰だめに構えて足を進めた。

向かうのはキャンピングカーの後部。そこにも死体が二つ転がっている。昨夜始末した連中の内の二つだ。外見……むしろ服装に見覚えがある。顔などは判別が付かないほどボロボロになっているので正直それで見分けられる程の記憶力は青年には無かった。

頭部に散弾銃を向けながら、足先で仰向けで倒れる死体の足先を突いた。動かない……。

もう一体も同じように突く、やはり動かない。当然のことであるが、青年は深いため息をついて散弾銃を下ろした。

死体は顔面から何から腐敗し、酷い臭いを放っている。腹腔が破れて消化系が零れ、その合間で何かが蠢いているのが見えた。恐らく蠅が産み落としていった蛆だろう。

ふと、死体を眺めながら、青年はゲームとは違う物だなと思った。

生物災害の名を冠する某有名ゲームでも彼等のような存在が出てきたが、あれの外見はこれと比べると幾分か綺麗だ。

人間に限らないことだが、生物の死体が腐乱すると徐々に肉が液状化して膨れ上がる。その度合いは環境に依るが、彼等もその例に漏れず、僅かに肉体を膨らませていた。

明らかに死んで腐敗しているのに、昨夜のように動いて此方に向かってくる……正に、ジョージ・A・ロメロ監督が創造したスクリーンの怪物、ゾンビそのものだ。

没個性的な怪物の筆頭であり、その源流はブゥードゥー教の懲罰的呪術にまで遡る。今やヴァンパイアやライカンスロープと並ぶ有名怪物だが、それらは空想の産物だった。

そう、“だった”のだ。

今までは空想の産物であり、決して物理的な干渉力を持って人間に害をもたらしはしなかった。しかし、それはあくまでかつての話である。

青年は死体を跨いでキャンピングカーの背後へと廻る。そこには発電機が備えられていた。燃料のメモリを確認し、十分にガソリンが入っていることを確認すると、青年は電源を入れてから、紐を引っ張ってスターターを起動した。

数度素早くスターターの紐を引っ張ると、発電機が目覚めたように震えて電気が作り出され始める。しっかりと発電している事を示すように赤い発光ダイオードの光が発電機に灯った。

青年は他のキャンピングカーの事は分からないが、このキャンピングカーはタープを張ってバーベキューをやっている時、外にも電気を供給できるように独立した発電機が付いており、それが居住区画の発電も担うようになっている。一々外に電源を付けに行かないと行けないのが面倒くさいが、エンジンを掛けるのも同じくらい面倒だ。

エンジンを付けても居室に電気は供給されるが、発電機よりもずっとガソリンを食うし、バッテリーの寿命も縮むので停車したままエンジンをかけ続けるのは色々とよろしくない。青年としては面倒くさくても外に出る方が、長期的には損失が少ないのでそうしていた。

しかし、電源だけなら天窓から天井に出て、身を乗り出して押せるが、スターターは流石に引っ張れないので表に出ないとならない。

それに、電源が付いた時の音も馬鹿にならないし、継続して低い

音を立て続けるので青年はあまり発電機を使いたくなかった。

発電機が起動したのを確認すると、青年は素早く車内に引き返した。

扉に鍵をかけ、キッチンのコンロのスイッチを入れると小さな電子音を立てて、小さな明かりが灯った。電気が供給されたのでＩＨのコンロが稼働し始めたのだ。

ケトルの湯が沸くのにさして時間は掛からなかった。ケトルの口に付けられていた笛が小さな音を立て始めると、青年は手早くコンロの電源を切った。

湯が沸いたのを確認すると、青年はシンクの上に伏せて並べていたカップの一つを手に取り、紅茶のティーパックを一つ放り込んでから湯を注ぐ。湯気を上げる無色の液体に緋色が滲み出し、安っぽいが優しい紅茶の香りが溢れ始める。

「カノン、朝食にしよう」

カップを片手にローテーブルに向かいつつ言うと、カノンが身を素早くベッドから床に降ろす。青年はカップを置くと、同じくシンクに洗って伏せて置いてあった犬用の皿を取った。

そして、木箱の近くに置いてあった、また別の段ボールに手を突っ込んで、一つの缶詰を取り出した。

笑顔で笑っているデフォルメされた犬の絵が印字されたドッグフードの缶詰だ。何処ででも手に入る物だが、珍しくタブを引き上げて開封する缶詰ではなかった。

缶詰を片手で弄びながら、青年は手近にあったナイフを取る。

掌に収まる小型の折りたたみのナイフ。様々なツールが柄に内蔵されている、俗に言うサバイバルナイフであった。十徳ナイフとも言い、多様なツールを有するので一つあれば様々な局面に対応出来るので非常に便利なのだが、下手に持ち歩けば官憲から職務質問を受けかねない片刃であるのに諸刃の道具である。

その中から缶切りを引きずり出し、手早く缶詰を開いた。

少し鼻につく生臭いドッグフードの臭いに青年は顔をしかめた。味は殆ど無いと聞くが、何故にこれほど生臭いのであろうか。

臭いに耐えながらドッグフードを手早く皿に開けてやり、じっと座って此方を見ているカノンの足下にそっと置く。

だが、カノンはそれに手を付けようとはせず、ただ、澄んだ瞳で青年を見上げて見つめている。蒼と金の二食のコントラストが美しいな、と思いつつ青年はカノンに背を向けてソファーに向かいつつ、ただ許可の言葉を呟いた。

許しを受けて静かにカノンが皿に顔を埋めて食事を始めたのを眺めながら、青年は静かに紅茶を啜りつつ、ソファー脇の段ボールに手を伸ばして中の物を一つ探った。

オリーブグリーンの袋。黒い印字が施されているそれは、自衛隊の携帯糧食であった。乾パンなどが入った簡易食であり、手軽な朝食には丁度良いだろう。

乾パンを取り出してオレンジスプレッドを塗りたくりながら淡々と口にねじ込んでいく。酷くぱさついているそれを咀嚼し、口が渇いてくると紅茶を流し込んで誤魔化す。何とも味家の無い朝食は手早く済まされた。

ふと見やれば、カノンも既に朝食を終えて、嘗めて整えたように綺麗な皿を前にして静かに座っていた。行儀の良い犬だ。

青年もゴミや乾パンの滓を袋に落として片付けを済ませ、キッチンの近くに置いてあったゴミ箱に放り込み、皿を軽く洗った。

さて、食器を洗うので水を使ったが、このキャンピングカーには水道なんてものは当然繋がっていない。

キッチンの水道から出る水は車に供えられたタンクから供給されているので有限だが、量だけは沢山あった。

貯水タンクの水はバスユニットと共有なのだが、カタログスペック上はシャワーにしても三〇分は連続で浴びられるので、無駄遣いしなければ相当の日数は保つ。

それだけでなく、キャンピングカーの内部に山ほど置かれた段ボールや箱の中には水を収めた物も沢山有り、飲料水が直ぐに枯渇すると言う事は無い。

人間が生存するに当たって、最も重要な物は水だ。環境に依るが、人間は水さえ有れば絶食したとしても一月は保つらしい。だが、水が無ければ三日と保たずに死ぬ。それを知っているから、青年は水に関しては他の物より多く積み込んでいた。

多くの水を集め、補給できる時はタンクに補給し、雨が降れば水を溜める。例え無補給であろうともある程度は何とかなる物だ。

青年は洗ったカップや皿をタオルの上に伏せて置き、同じくキッチン台の上に置いてあった保温ポットの中に湯を注いでおく。これで今日一日分の湯は確保できるだろう。

電気を使わない魔法瓶と同じ構造の保温ポットの蓋を閉じた時、不意にカノンが自分のズボンの裾を引っ張った。

ふと見下ろすと、ズボンの裾を軽く噛んで、此方をどことなく険しい表情で見上げていた。

青年は何かと問うことは無い。目線が合うとカノンはぱっと裾を離し、足下に座り込む。その頭を軽く撫でてやりながらも、青年の目は運転席へと向いていた。

再び立てかけてあった散弾銃を手に取り、ベッドサイドに置いてあったＭ３６０－ＳＡＫＵＲＡを引っ掴んで運転席に向かう。

いつの間にか、また、あの枝をへし折る音が聞こえてきていた。

青年は舌打ちをして背後を見た。キャンピングカーの後部、バスユニットへ続く扉。正確には、位置的にはその向こう側にある発電機をだ。

心底面倒臭そうに舌打ち一つした後、青年は梯子を下ろして再び天井へと昇った。

相変わらず空は嫌味なまでに蒼くて清々しく澄み渡り、空気は身

を切るように冷えている。絵になる冬空の景色ではあるが、悠長に眺めている暇なぞ有りはしない。キャンピングカーを囲むように枝を踏み折る音が増え続けていた。

「思ったより多いな……。流石に長くつけ過ぎたか」

忌々しげな視線は斃れている亡骸達に向けられていた。

何処までも静かな森の中に響き渡るのは発電機が低く震える音だけ。それに答えるようにして、森の中を何かが近づいてくる音がひっそりと発電機が立てる音に紛れて聞こえて来る。

音は全方位から響き、距離もまちまちだった。正確な距離は分からないが、さして遠くはあるまい。

今のうちにと、キャンピングカーの後部へとタンクなどを跨ぎながら向かい、細い鉄パイプを強引に溶接して新造した柵へ片手で捕まり、下へ大きく身を乗り出す。

右手を精一杯伸ばすと、何とか発電機のスイッチに手が届いたので電源を切った。発電機は数度大きく震えた後で完全に静かになる。電源を切った直後なので、運動の余熱が残っているが気にしている暇は無い。

だが、もう遅かった。青年が身を再び屋上に戻そうとした時、木々の合間に頭が大きく揺れながら此方に向かってくる人影が見えた。

奴らだ……。

身を屈める際に置いた散弾銃を取り上げ、指で安全装置を弾いて

外す。既にポンピングは済ませているのでチャンバーに弾薬は装填されている。後はトリガーを引き絞るだけで、鋼に秘められた暴力が発動する。

急ぎもせず、慌てもせず、青年は静かに視線を巡らせながら待った。音が尽きても人影は消えず、不確かな足取りで此方にゆっくりとだが、確実に近づいてくるのが見える。

数分もすると、ぼんやりした人影では無く、完全にその姿が見えるような距離にまで奴らは到達していた。

昨夜と同じく不確かな足取りで森の中を進み、時折木の幹や木の根にぶつかったり、足を取られて倒れるが、のろのろと起き上がって此方への足は止めない。愚直なまでに一直線に奴らは向かってくる。

外も中も腐り果てた人間……いや、元人間達。その外見は先ほどゾンビと例えたが、あまりにも陳腐な形容であろうとも、それ以外の何と表現できようか。

怨嗟の呻きを上げながら此方へ更新してくる亡者の群れを既に一〇メートルの距離に眺めながら、青年は肩付けに散弾銃を構えた。

狙いはキャンピングカーの天井、その中央に立つ自分から見て左側、片腕が殆どもげているスーツを纏った死体だ。

本来なら、この距離で散弾銃は弾丸が拡散して対人での威力には期待出来ない。面での攻撃に優れ、小粒の鉛玉が無数に突き刺されば普通の人間ならば痛みで歩みを止めるだろうが……あれらにその効果は期待するべきではない。

だが、青年は散弾銃のサイトを覗き込んで狙いを付け、迷い無く引き金を絞った。

炸裂音が響き、僅かに銃口が跳ね上がる。

そして、体感では即座に、実際には零コンマ数秒の後に前を歩いて居た男の喉に近い位置の胸部が弾け飛び、頭がもげた。

まるで冗談の様に首が、肉と砕けた脊索を伴ってごろりと、抜け落ちるように脱落し、黒く濁って腐った血が飛び散って地面を黒く染め上げる。

青年が放ったのは、ただの散弾では無い。

親指の先ほどの鉛玉が一つだけ詰まった大粒のスラッグ弾だった。本来なら壁越しに誰かを撃ったり、装甲を貫通させたり、熊のような巨大な生物を撃つことを目的に作られた弾丸である。

その威力は凄まじく、着弾点がまるで挽肉のようになり、衝撃が伝播して周辺の肉が見事に刮げていた。

当然であろう、本来人間のように脆弱な目標を破壊するために用いる弾では無いのだ。それが単なる腐れた蛋白質とカルシウム、そして水分の複合体にぶつければ割れた水風船のように弾けるのは目に見えていた。

完全に無力化出来た事は確認するまでも無く明らかだ。青年は手早く散弾銃をポンプして先端が破けた薬莢を排出し、次弾を装填した。

次は先ほど撃った奴の隣に居る女に狙いを付ける。四肢は揃っているが、腐汁と血で汚れた平服の内で、表皮の腐敗が進んで全身が太っているかのように張り詰めていた。

狙いを付け、引き金を絞る。再び轟音が響いたが、今度は狙いが甘かったか。そもそも長距離を狙う銃と弾では無いのだが、風の悪戯か、手の震えかで弾丸は右肩に着弾した。

腐汁が弾け、肉片と骨片が宙を舞い、右腕が数度回転しながら何処かへ飛んでいく。スラッグ弾の衝撃は凄まじく、人間に蹴られた程度は済まない。驚くような勢いで女が転んだが……まだ藻掻くように動いている。

連中は頭を潰さないと止まらない、頭の中で思いながらポンプして再装填、しかし次の目標は変える。腕が無ければ起き上がるのに時間が掛かるので殆ど無害だ。

もう一発撃ち、小学生くらいと思しき死体の胸を砕いた。頭がころりと支えを失ったように転げ、惰性で足が数回ばたついた後で完全に止まった。

そこから先はもう、作業のような物だった。

弾が切れると装填し、ポンプしてチャンバーに送り込み引き金を絞る。ただ、淡々と高所から愚直に向かってくる死体の胸を砕いて頭を吹き飛ばす。

数分もして、大きすぎる銃声に耳が麻痺し始めた頃にはポケットのにねじ込んでいた弾も尽き、青年はＭ３６０に持ち替えて射撃を

続けていた。

スラッグ弾よりもずっと小さくちっぽけな３８スペシャルの銃声が等間隔で響いては、薬莢が天窓から下に放り込まれる甲高い音に続く。既にキャンピングカーの周囲に転がる死体は新たに四〇以上が加わろうとしていた。

手はリコイルを受け続けて震え、肩付けに構えていた散弾銃の火薬滓で頬が黒く染まっている。肩も、幾度もリコイルを受けて痺れを得ていた。あまり連続して撃つ物では無いなと思いつつ、それでも青年はトリガーを絞り続ける。

スラッグ弾で胸を砕き、３８スペシャルで頭の中身をぶちまけさせる。その作業は微風で、昨夜と違って明るい今からすると技術的には楽な物だった。

結局、奴らの一体たりとも青年にたどり着くこと無く、その腐れた体を砕かれ、汚れた液体を撒き散らしながら血に斃れ伏した……。

もう、動く物は無い。銃声を聞き続けて聴覚は殆ど麻痺して耳鳴りがするが、青年は辺りを見回すとため息をついた。一応の所驚異は排除出来ただろう。

足下を見ると無数の薬莢が転がっている。ショットシェルのプラスチック薬莢で、弾丸を射出して破れ、熱で変形し変色しているのでもう使えない。

ショットシェルは威力が高いが、殆どがプラスチック薬莢で、他の銃の真鍮薬莢と比べて再利用が出来ないのが惜しいなと思いつつ、

足下に転がる空薬莢を蹴り腹って下へと落とす。

銃声がやんでも、耳の痺れは中々取れてくれない。じぃんと、何時までも響くような耳鳴りが延々と残っている。耳当てでも都合した方が良いのかもしれないが、万一の時に音が聞き取れないのは困る。

いや、こうなっては同じか、と青年はため息を付きながら床に置いていた散弾銃を拾い上げ、痺れた肩を回しながら居住区へと戻る。

中では銃声に反応しながらも、無駄に吠えず我慢していたカノンが青年の帰りを待つかのように、梯子の下に鎮座していた。

火薬滓でうっすら汚れ、火薬の臭いが染みた手で青年はカノンを撫でるが、彼女は嫌がる素振りも無く目を細めて小さく喉を鳴らした。

「カノン、そろそろ移動するか。ここにも連中が寄ってきている」

自分の提案に具体的な答えなど帰って来よう筈がないと分かっていても、青年はカノンに語りかけ、カノンは何も言わずに青年の目を美しい二色の瞳で見上げる。

静かで、言葉を交わさずとも、二人の間で意思の疎通は出来ていた。

「よし、行こう……次は暖かいところが良いな。とりあえず……南にでも戻ってみるか。一度大阪の様子を見て起きたい」

言いつつ、青年は使い終えた散弾銃を木箱に立てかけ、運転席へ

と向かう。

座席に深く腰を下ろしてシートベルトを締め、刺しっぱなしにしていたキーへと手を伸ばす。ガソリンメーターに目をやると、殆ど満タンだ。これなら大阪まで無補給とまでは行かないが、そこそこの距離を走れるだろう。

キーを回そうとすると、カノンがさっとやってきて、助手席に腰を降ろした。そのまま広い座席に寝そべり、コンパクトに体を丸める。自分の前足を枕のようにして顎の下に敷いている姿は何とも愛らしい。

ふっと、皮肉の緊張をほどいて青年は車のキーを回した。数度機嫌悪そうにエンジンが唸った後、発動機がしっかり回り炉に火が入った。

そろそろバッテリーやら何やらを変えて、簡単に整備した方がいいだろうか。そう考えながら青年は車を発進させた。下で、小枝以外の何か硬い物をタイヤが踏み砕く軽い音が幾つも響くが、気にせずアクセルを踏み込み続ける。

「……せめて安らかに、とは口が裂けても言えんか」

青年は小さく呟きながら車を発進させた。下から硬い何かをタイヤがへし折る乾いた音と、湿った何かを潰す気味の悪い音が幾度も響いた。

キャンピングカーがぎりぎり通れる小道へと向かい、そろそろシーズンが近づきながらも、今後決して誰も訪れぬであろうスキー場を後にする。

そこに残されたのは、弾丸にて打ち砕かれた死体のみ……決して、
黙して語る事の無い、いずれは風化して消える彼等のみだった……
……。

青年と犬と寒い朝（後書き）

お楽しみいただければ幸いです。もしもよろしければ感想などお待ちしております。

青年と犬と、無線通信機（前書き）

例によってグロ有りです。苦手な方はお気をつけを。

青年と犬と、無線通信機

さして広くもない道があった。

コンクリートで舗装された、深い山間を走る二車線道路であるが、その上には転々と車が放置され、荒れ放題であった。

そんな、かつては国道として整備されていた道を一台のキャンピングカーが走っていく。

知らぬ人間が見れば、キャンピングカー？　と軽く首を傾げるであろう、全面を装甲で覆い、タイヤをスカートで護り障害物を払いのけるドーザーを装備した鉄の塊は、ゆっくりとした速度で静かなエンジン音を上げながら進んで行く。

そこから漏れ聞こえるのは音楽だ。多数の金管、木管、弦、打楽器で構成されたメロディーに合わせて響くドイツ語の低い旋律。

カーラジオから流されているのは、接続された携帯オーディオプレイヤーより出力された、ドイツはベルリンフィル交響楽団の演奏する第九・四楽章……言うところの歓喜の歌だった。

それに合わせ、片手でハンドルを操り、空いた手を窓際に付いて暇そうに運転をする青年が下手な鼻歌を合わせる。

唯一の道連れであり、青年の相方であるシベリアンハスキーのカノンは、助手席で丸まって寝そべり、旋律に傾けるかの如く厚みがある二等辺三角形の耳をひくつかせている。

退屈な旅であった。

信号に捕まることは無く、運転席に居合わせるどちらもが寡黙……と、言うよりも一者は人語を解さない。

ただ、のんびりと鳴り響くＢＧＭを聞きながら、青年は時折放置されている車両を躱すためにハンドルを切る。

他に走る物が無いので気楽な物だ。目に入る物はと言えば放置車両とガードレール、そしてその向こうに連綿と広がる山々と緑だけ。剰りにも単調かつ起伏が無いので、青年は目が馬鹿になりそうだなと思いながら低速で車を走らせる。

ふと外に目をやると、時折放置車両の中で何かが動いているのが見えた。人型で扉を叩き続けるそれは、きっと人間では無いのだろう。

暇そうに運転を続け、どうしてこうなったのか青年は何となく思い返していた。

人間が“ああなってしまう”ようになったのは、今年の四月頃の事だっただろうか。確か、桜がまだ咲いていたような気がする。

人間が突然意識を失ったかと思うと、起き上がって理性を無くし人々を襲う。その者達は人間が大凡生命活動を停止していると言って良い状態でありながらも動き続け、ただただひたすらに生者を襲う。それが子供や家族、他人であろうとも見境無く。

その兆候が、世に広く発覚するまでに全く無かった訳では無い。外国で奇病が流行っていると言うニュースや、入管がそれを水際で

止める為の検疫をやっているといった記事は、毎日飽きることを知らぬように流れていたからだ。

また、失踪者が多く出て、それと同じく暴力・殺人事件も多数報道されていた。単に四月は変人と犯罪者が増える法則に則っただけだろうと人々は思い、その海外で流行っている奇病とは何の関係も無いと思い込んでいた。

奇病とは新型のインフルエンザやその辺りの事だと誰もが思い、対応や対策も精々マスクを用意するくらい……。

そして、日常がある日突然崩壊してこのような常況へと成り果てた。今までは中々に成熟して便利な物だと思っていた社会も、一度揺らぐと崩れるのは簡単な物だ。

それを象徴するかの如き情景が自分の目の前には広がっている。昔ならば事故車両や放置車両が、僻地の山間部であろうとも長々放置され続ける等と言う事は絶対にあり得なかったであろう。

かつては多数の車が多くの人や物を運んでいたであろう国道も、今となっては走るのは自分だけ。そして、それに乗るのは一人の人間と一匹の犬。おまけに積まれているのは、一人では一昼夜打ち続けても消費仕切れぬであろう無数の弾丸と武器という有様だ。

そう考えると寂しい物だな、と思いつつ青年はただひたすらに、極力何も考えないように努力しつつ車を走らせる。本当は対向車も何も無いので、誰憚ること無くかっ飛ばしたいとは思うが、時折落下物があるので危なっかしく速度を上げることは難しい。

荒れ放題であるが故に、運送トラックからこぼれ落ちたであろう

段ボールや家電、建築資材等の障害物には事欠かない。不用意に速度を出すと、ガードレールを突き破って森にダイブすることになりかねないのだ。

普通ならば狭い市街を走るような速度で、青年はいらつく事も焦りもせず、淡々とハンドルを操る。

もう真冬と言って良い時期なのだが、今日は日が良く照って暖かい。優しい陽光がフェンスで護られた窓から格子状に差し込み、熱を与えてくれる。恐らく、同じように光を浴びているカノンはさぞ暖まっていることだろう。

不意に、丸まった柔らかそうな体に顔を埋めたくなる衝動に駆られるが、青年はぐっと押し込めて視線を前に固定した。

それに、犬の毛というのは見た目よりも結構硬くてごわごわしている物だ。おまけに、水は無駄遣い出来ないのでお互い少し汚れているので、あまり気持ちは良くないぞ、と自分に言い聞かせる。

ＢＧＭがそろそろ最も盛り上がる、誰もが知っている小節に入ろうとした頃、青年は腕時計をちらと見やって時刻を確認する。

時刻は短針と長針が近づき合い、そろそろ盤上の？の上にて抱擁を交わさんとしていた。

もう昼かと思いながらも、最近は一日二食で通しているので車は止めない物の、そっと助手席……そのダッシュボードの上へと手を伸ばす。

そこに置いてあったのは古びたアマチュア無線機であった。通信

範囲が広いだけが取り柄のオンボロ型落ち無線機で、かつては車に乗っている間の暇潰しとして、何処の誰とも知れない人間と会話するのが流行った時期の遺物だ。

と、言ってもその流行は殆どアメリカでの物なのだが。

青年はスイッチを弾いて入れると、甲高いノイズが小さな音で入った後、砂嵐のような音だけが流れ始める。

それを聞きつつ、片手でハンドルを握り、もう片方の手で円形のつまみを操作して周波数を手繰る。合わせる周波は、本体に貼り付けてある大判の付箋に書かれた数値だ。

適当に捻り、後はちらちらと視線を其方に送りながら周波数を調整する……次第にノイズが収束し、クリアになって行き、最終的には音が消えた。

周波数がメモ書きの物と一致した事を確認すると、青年は受話器を取り上げて声を掛ける。

「テステス、……聞こえたら応答を求む」

単調で極めて棒読みな声音で話しかける。反応は無いが、青年は暫し待った。

すると、何かを引っかき回すような音がスピーカーから鳴り、一度ノイズが響いた後で声が続いた。本体が調整と手入れ不足のせいで引き起こる、ひび割れた音であった。

『はいはい、こちら大阪の某複合ショッピングセンターだよ。ど

ちらさま？』

ひび割れて、ノイズが混ざっていても声の主が若い女である事が分かった。気軽で明るい調子の声の主は、急いで通信に応じたのか、呼吸が少しだけだが乱れていた。

「私だ」

『おお、名無し氏ではないか。久しぶりー、長野の方はどうだったー？』

脳天気な声を聞きながら、青年は放置車両を避ける為に乱れた軌道を描いて車を動かす。運転免許を取って二年にしかならないが、飽きるほど走らせると慣れる物だなと思いつつ答えた。

「大した物は何も無いな。死体と放置車両、それと偶に自衛隊の装備なんかを拾えた程度で生存者は殆ど見なかった」

『そか、やっぱどこも似たようなもんかー……つか、通信可能域入ったって事は、もう大阪近い？』

ちらとカーナビを見やると、そろそろ長野の県境を抜けて、地方的には名古屋に入ろうとしている。

渋滞に捕まらないだけで、さして速度を出していなくても移動は捗るだなとつくづく思いながら、進路上に転がっていた死体を避けた。踏みすぎると血が駆動部に掛かってへたるので、例え面倒くさかろうと避けた方が良い。

「そろそろ名古屋だな……来る時も通ったが、人気は全くない」

『名古屋かー、お土産に味噌持ってきて欲しいねぇ、他は鶏とか。つか、名無し氏、こっちに会いに来てよー。通信繋がった事自体一月ぶりくらいだしー』

そう言われ、この喧しい通信相手の事を思い出す。大阪でうろちょろしていた頃、何とも無しに無線機を付けてみたら繋がったというだけの間柄で、互いに情報を交換したりしていることくらいしか接点は無い

しかし、ふと思えばこの距離でどうやって大阪からの電波を受信できるのだろうか。日本は狭いが、指先で一またぎ出来るのは世界地図の上だけでの話しであり、実際には中々の距離がある。

とはいえ、無線の事など門外漢なので詳しいことは考えても分からないし、聞いて説明を受けたとしても……理解することは難しいだろう。。

この明るい声の女とは半年くらいは連絡を取り続けていたので、全く以て他人……とも言い切れない微妙な仲だった。今で言うネット上での友人に近いのだが、そう言うには何とも歪だった。

此方が黙っていると、女は何を思っているのかは知らないが更に言葉を続けてくる。まるで、黙ったら死ぬというようなゲッシュでも結んでいるかのようだ。

『そもそもさ、私、名無し氏の名前すら知らないんだけど。この名無し氏だって、苦肉の策で付けたニックネームだしさぁ。いい加減教えてよー』

「別に名前なんてどうでもいいだろう。大勢の中から個体を認識するだけの記号で、結局この周波数で其方と話すのは私だけなんだから、私は私で十分だ」

『何それ、厨二くせぇー』

げらげらと通信機の向こうで女人にあるまじき下品かつ大胆な笑い声が聞こえてくるが、それでも男は黙殺した。

女は笑い過ぎて息も絶え絶えだが、ある程度笑いが落ち着いたのを見計らうと、今度は青年から話題を切り出す。しかし、今の台詞の一体何処がツボに入ったというのだろうか。

「其方はどんな具合だ」

『んー？　楽しい事も新しい事も、なーんもないよ。昨日も明日も明後日もー♪　毎日缶詰やんなっちゃーう』

調子っ外れな節を付けながら声の主は歌うように言い、更に切ること無く言を繋げる。それにしても、この女は話す切っ掛けを与えると際限なく話し続けるな。

『最近は近くのパトカーから弾とかてっぽーも取り尽くしたからねぇ。食料品売り場の物も枯渇し始めててんてこ舞ーい。

試しで作ってる菜園からもあんまり作物は取れないし、食べられる生き物つっても危険無く狩れるのは鳥くらいなんだけど……鳥は危ないからねぇ。

もっと遠くに出てアイテム探そうぜ派と、節約して引き籠もろう

ぜ派で喧々囂々って感じかな』

凄まじくアバウトかつ要点を得ない報告だったが、大まかに常況は理解できた。

この女はショッピングセンターに居ると言ったが、正確には大阪のとある都市にある大型複合ショッピングセンターに二〇〇人近い人間と共に立て籠もっているらしい。

現代の人間でも意外とジョージ・A・ロメロに毒されている人間は多いようで、このような事態になって世が混乱した時、大勢が集まってショッピングモールに立て籠もったそうだ。

存外古い映画だが、結構見られているのだなと、密かにファンであった青年は嬉しく感じる。かといって、何の役にも立たないのだが。

伝聞系の情報が多くなってしまったが、仕方が無いだろう。なにせ、無線機でしかやりとりが出来ないので聞いたことしか知らないのだから。

ショッピングセンターに立て籠もるのは、生き延びる為の方法としては最良に当たるだろう。物資もあれば食料もあるし、スペースも広い。上手く区分け出来れば一つの共同体として活動出来るはずだ。

が、しかし……それはあくまで、物資が充足して、満足に配給出来ている場合に限る。

物資が枯渇すれば共同体はまともに活動しにくくなり、諍いが産

まれる。そして、食料が少なくなっただけで、その小さな種は、いとも簡単に内乱へと芽吹くのだ。

小さな諍いや喧嘩の結果、共同体から単なる有象無象が寄り集まった群衆へと変化すれば……その結末は想像に難くない。

『私はあれだよー、通信機で生存者探したり、適当に設置した監視カメラ見てるだけの簡単なお仕事だからいいんだけどさぁ……拳銃拾って持ってる若いのは本当に血気盛んで……』

「お前さん、まだ十代だって言ってなかったか」

『ええ、紛れもない十代ですよ？　硝子の十代！！』

「ああ、おばさんだな、言語センス的な意味で」

うっせーやいと大声での批判が飛んできて、スピーカーの音が盛大に割れた。それに驚いてカノンが頭を擡げるが、直ぐに興味を失ったように体へ頭を埋めた。

『とにかくさー、名無し氏ー、家来てよー。ついでにたっけてよーう』

「半年前から延々聞いてるが、こっちも余裕が無い」

言い切ったが、実はそんなことは無い事を青年は自覚していた。

後部を見やると無数の木箱が生活スペースを圧迫するように置かれているし、実は硬質密閉ケースで屋根にも武器が入った物が幾許か括り付けてある。

弾は膨大過ぎて数えていないが、武装だけは嫌になるほど充足している。全て、死んだ警察官や自衛隊員、放置された軍用トラックから残さずかっぱらってきた物なので、コストと言えば、運ぶ労力くらいの物だ。

恐らく、女の話を聞く分にはショッピングセンターの戦える人員全てに配っても余るほど火器は充実している。だが、それで相手を助けても自分に利益は無い。むしろ害になるだけだ。

何故そう思うのかというと、極限状態に置かれた人間が何でもするというのを、青年は嫌というほど見てきたからだ。

彼等は自分が武器と頑丈な移動手段を持って揚々とやってくれば、自分を殺してそれらを奪うだろう。多大な利益を与えること無く、それを与えて貰える訳が無い事を分かっているからだ。

だまし討ち、伏撃、歓待すると見せかけての毒殺……油断はトイレでも出来ない生活が始まる。それが容易に想像出来た。

自分とカノンが生き延びるのが、青年にとっての最優先事項だった。このキャンピングカーは、青年にとってのカルネアデスの板なのである。

カルネアデスの板とは、法律で用いられる緊急避難の例えだ。船が沈み、自分は自分一人なら何とか浮かんでいられる板にしがみついている。だが、もう一人がしがみつけばその板は沈んでしまう……。

そんな時に、その他人を蹴落として殺してしまっても、罪にはな

らない。そんな話しだったが、正にこのキャンピングカーは大洋をたゆたう一枚の板なのだ。手放せば、青年はそのまま沈んで死んでしまうだろう。

他人に話せば、それは強迫観念だの、人間は助け合えるものだと説得されるかもしれないが、青年にはそう思えなかったし、その実例も嫌というほど見ていた。

だから、青年はこの板を死んでも離すことは無いだろう。

万一、ショッピングセンターに身を寄せるとすれば……。

「其方が安定して、私を受け入れられるくらいの余裕が出来たら寄せて貰うかもな」

襲ってまで物資を手に入れようとする貪欲さや、それを生み出す逼迫感が無ければ交渉も出来なくは無いだろう。だが、今の時点では死んでもご免……と、言うよりも自傷行為に近い。

『ちぇー。でも、何時でも待ってるからね。

ああ、名無し氏は缶詰好き？　最近はほんっと缶詰ばっかでさー。たまには美味しい物食べたいよー』

「私は自衛隊の糧食ばっかりだな……味が濃くて旨い。乾パンのジャムも慣れれば割かしいける」

『ぬぁー、ミリメシ羨ましいぃー！　私も鶏飯たーべぇーたぁーいー！！』

地団駄を踏む雑音がちらちらと聞こえてくる……それにしても、若いし明るい語調の女なのに、無線を弄れたりミリタリー関係の知識があったりと変な女だ。

「探せばあるだろう、自衛隊の放置車両くらい。上手く行けば小銃も拾えるぞ。

大阪なら伊丹まで出向けば、第三師団の駐屯地だってあることだしな」

『近くには無いんだよぉーう。それに、人が居る気配をどうやって察してるかは知らないけど、近所に山ほど集まって来てるしぃ』

青年が絶えず、では無いにしろ頻繁に移動している理由にはこれにあった。連中……あえて分かりやすく言うが、歩く死人共はどういう訳か人間が居る場所に集まってくる。

何度も間際で見て壊しているから分かるが、それの目は白濁して腐れていたり、脱落して暗い眼窩が覗いている事が多いので、まず視覚から情報を得ている事は無いだろう。

連中は音に敏感で、大きな音は過敏に反応し、例え小さな音でも、それしか断続して鳴る物が無ければ反応して遠くからでものろのろとやってくる。それで、青年は発電機を剰り使いたがらず、エンジンも移動する時しかかけないのだ。

だが、反応する物が音だけかというと、そうでもない。青年が普段愛用している靴は、分厚い軟質ゴムが靴底に張られた軍用のブーツで、足音はかなりゴムに吸収されて小さくなる。だが、それでも連中はめざとく此方を見つけて追ってくるのだ。

かなり気をつけて歩いてもやってくるので、青年は臭いが原因ではないのかと践んでいた。

推測の域は出ないのだが、恐らく、ホルモンか何かで同類か、それ以外の食べ物かと区別しているのだろう。

全く、無駄に高性能で嫌になるな、と嘆息しつつ、青年はアクセルを踏み込んだ。走っている国道は長い直線に入り、ここから見える限り地平線まで障害物は無い。

カーナビのモニターを見やると、今の地平線まで見える直線が終わって暫くすると、長いトンネルにぶち当たって、また深い山の合間に戻るので通信は断絶してしまうことだろう。

どうやら色々と改造して、無線を強化しているのだろうが……こちらは古いアマチュア無線で、良く大阪まで届いているなと思う位なのだ。障害物に挟まれれば、直ぐに通信は断絶するはずだ。

「そろそろトンネルに入るが、その前に言っておくことは？」

『んー、特に思いつかないけど……気をつけてーってのと、お土産よろしくー？　かな』

脳天気に言われても、青年は自分のリズムを崩さずに返す。この女性と青年では、人生の芸風が大きく違うのだろう。

「だから、そっちには行かないと何度言わせれば。気が向いて暇だったらまた通信を入れる。以上」

『うーい、気長に待ってるよぉーう。それじゃ、オーヴァー』

通信を切るのは向こうからでは無く、此方からだった。付けた時と同じように、片手を伸ばして電源を弾いて消した。スピーカーから一度、電波が途切れる音が響き、後は完全に沈黙する。

再び、ＢＧＭのクラシックだけが流れる静かで穏やかな空間が運転席に帰ってきた。青年は深い溜息をつきながら、速度を少しずつ落としていく。地平の向こうにカーブが見えてきたからだ。

トンネルを越えて、山を幾つか抜けた頃には……何かマシな物があればいいが。

そう思いつつ、ただキャンピングカーは走っていった。

鮮烈な橙の光を浴びて、全体が淡いオレンジに染まったサービスエリアがあった。簡単な給油所や食堂に土産屋等を兼ねた建物と、広い駐車場を抱えた、車にて旅をする者達の休憩場だ。

時刻は夕方に差し掛かり、日が山の稜線へと沈みつつあるそこで、一台のキャンピングカーが停まっている。装甲が施された青年のキ

ャンピングカーであった。

青年はジャケットを着込み、キャンピングカーの上に居た。天窓から這いだして武器を片手に周囲を眺めている。

車の周囲には、無数の影が蠢いていた。夕日が差し込んで陰影がはっきりした駐車場に、疎らに散った死体共が頭を揺らしながら青年へと向かって歩いている。その数は概算でだが、２０～２５体ほどであろうか。

「さして多くないが……いいか」

青年は呟きながらジャケットのポケットに手を突っ込み、ある物を取り出した。キッチンタイマーであった。白い卵を象ったキッチンタイマーで、どこにでも有りそうな物だった。

軽く操作し、十秒後になり始めるようにして、音量のつまみも最大まで捻り上げる。これで、スイッチを押した十秒後には凄まじい電子音がタイマーから上がるはずだ。

青年はタイマーを起動させ、アンダースローで優しく駐車場の、比較的車が無いところへと放った。

からからと軽い音を立ててタイマーが地面を転がっていき、その内車から一〇メートルほどの距離で止まった。

そして、十秒の後にしっかりと作動して、けたたましい音を立て始める。すると、ふらふらとキャンピングカーの上に立つ青年へと向かっていた死体達が、一度立ち止まった後で一様にキッチンタイマー

へと向きを変え始めたではないか。

彼等は音に敏感だ。音でだけ世界を感じている訳では無いのだが、それでも音に頼っている部分が多数を占めていると青年は分かっていた。

現に、青年という餌が前にあろうとも、甲高い目障りな電子音を立てる無機物へと彼等は殺到しようとしている。分かりやすい餌よりも、大きな音の方に反応する……感覚の多くを音に頼っている事がよく分かった。

そして、青年はこの習性を利用して、このような広く、下に可燃性の物が少ない場合はとある掃除方法を行うようにしていた。

足下に置いてある複数の瓶、その一つを手に取る。大きな洋酒の瓶で、その口は開けられており、コルクの代わりに新聞紙が生えていた。

モロトフカクテル……火炎瓶だ。オクタン値の高いハイオクガソリンとベンジンを混ぜ込んで作った焼夷手榴弾の一種であり、瓶が割れることにより消えにくい炎が広範囲に広がる。

そう、音で死体を一カ所に集めて、一気に焼き殺そうというのだ。数が集まるので始末が手早く済み、また弾の浪費も控えられる。極めて合理的な壊し方だった。

だが、人間ならば直ぐに死ぬだろうが、彼等は人間のように呼吸をしている訳では無い。なので、焼け死ぬまでに中々の時間が必要になる。それに、燃えながらもフラフラ歩き回るので延焼の危険性もあるのだ。

故に、市街地や山の中のような燃え移りやすい物が多い場所では、この駆除方法は使えなかった。流石に大火事になれば色々と不味い。

ただ、死ぬのに時間がかかると言っても、別にウェルダンになるまでじっくりと焼かなければならない訳では無い。三分程もすれば脳にも熱が十分に廻ってバタバタと死んでいく。その間に此方へ寄ってこられなければ良いだけだ。

キッチンタイマーへと死体共が群がるのを眺めながら、その数が十分な数に達したと見ると、青年はポケットからジッポライターを取り出した。

金色の本体に胡蝶がレーザー刻印された美しいライターで、上手に使い込んだのか、金色のくすみ方が絶妙であった。地金の強すぎる反射がくすんで弱り、蝶の意匠が夕日に映えた。

夕日の光に黄金の本体が溶け、まるで胡蝶が空を飛んでいるように見える。数秒だけ意匠に見とれた後、青年は親指で蓋を弾いた。油の香りが僅かに鼻腔を擽る。

石を指で回して火花を起こすと、油が染みた火元へと小さな淡い炎が灯った。そして、発火元となる新聞紙に火を移す。

そうして、出来るだけ高く弧を描くように放り、コンクリートが見えている場所へと送り込んだ。

火の付いた先端が回りながら光の軌跡を描いて落ちていき……弾けた。

液体が広がり、ほぼ同時に火が散って広範囲へと燃え移り……死体が燃え上がり始めた。ほぼ全ての死体が範囲内に入っており、足先から炎が昇り、全体を嘗め尽くしていく。

火が付いて尚彼等は自分たちと同じように炙られて音を潰しつつあるタイマーに群がり続け、意味の無い動きを繰り返す。

だが、その内にタイマーが溶け、壊れて音を発しなくなった。

このままでは大変まずいことになる、火が付いたままの死体がキャンピングカーに殺到すれば、自分までもが炙られることになるので……青年は、もう一つキッチンタイマーを取り出して、即座に鳴らしながら死体達の更に向こう側へと放った。

残響を青年の耳へと残し、夕日を浴びてもう一つの雛を模したタイマーが弧を描いて飛んで行き、燃えさかる死体の頭上を越えて、駐車場のより遠き場所へと落着する。

そして、身を業火に焼かれながらも死体はフラフラと歩いて行く。ただ愚直に、それしか知らないと言うかのように。

大きな音へと燃えながら引きつけられ、本来狙うべきである青年よりはずっと離れていく。そして、戻る前には……。

脳が煮立ったのか、死体達はどんどんと斃れて行き、最後には嫌な臭いを上げて燃える腐肉の塊だけが駐車場に残った。

青年はそれを無感動に眺めながらライターをしまい、足下へと置いてあった短機関銃へと手を伸ばす。大きな減音機を銃口先端に備えた、警察の特殊部隊が持っていたであろうと思われるＭＰ５Ａ５

であった。

スリングで短機関銃を肩に引っかけ、青年はキャンピングカーの内部へと戻る。普段と同じようにカノンが静かに彼のことを待っていた。

きっと、青年が上で掃除をしている間中、静かに座り込んで天窓を眺めながら、青年の帰還を待っていたのだろう。

青年がカノンの頭を撫でてやると、大きな雌犬は喜ぶかのように目を細め、もっとと強請るように手を頭に押しつける。

暫く撫でてやった後で、青年は武装を確認した。服装は普段着……スラックスとシャツ、そしてベストを着込み、その上にジャケットを羽織っている。全身を黒で統一したその姿は、青年からすると何かしらのこだわりでもあるのだろうか。

身に纏うのはそれだけではなく、ジャケットの上から体を護るように纏う黒いベスト……様々なポケットやホルスターを備えた防弾ジャケットがある。小さく日の丸が縫い付けられているそれは、銃と同じく警察の放置車両から拝借した物だった。

ベストのホルスターにはＭ３６０－ＳＡＫＵＲＡがねじ込まれており、よくみれば右の腿にもベルトに通し、ぐるりと腿を巻くベルトで保持するホルスターを装備しており、そこには自動拳銃が差し込まれていた。

映画や漫画でおなじみの、丸みのあるスライドが特徴の自動拳銃、Ｍ９２Ｆであった。９ｍｍ弾を装填できる軍隊御用達の自動拳銃であり、これは米軍の物らしき死体から失敬した物だ。

ＭＰ５とは弾丸に互換性があるので、万一ＭＰ５が壊れた時もマガジンから弾丸を抜き取って使えるので、組み合わせとしてはバランスがいい。気になる点と言えば、日本人向けの設計では無いので、ダブルカラムマガジンを飲み込むグリップが青年の手には些か大きすぎ、発砲音が大きい点くらいだ。

だが、万一追い込まれては発砲音など気にしてはいられない。速射性能と装弾数、そしてマガジンチェンジの用意さが大切になってくる。なので、かさばろうとも青年はサイドアームを二つぶら下げていた。

後の武装と言えば、腰裏でベルトに通してぶら下げたマチェットくらいだろう。これは何処で見つけたかは忘れたが、気がついたらあったので最初からキャンピングカーに積んであったのかもしれない。出来れば連中と近接戦闘はしたくないが、それでも弾が切れた時の事を考えると持っていた方が良いし……何か障害物があった時、壊すのにも使える。

ガチャガチャと身につけているが、大抵の物は布製なのでこすれ合っても大きな音は立たず、少し苦しい程度のタイトさで締めているので動く時にぶらついて邪魔になると言う事も無い。

武装が全て完全に固定されていることを確認すると、青年はＭＰ５のエジェクションスイッチを押してマガジンを取り出し、きっちり弾丸が詰まっていることを確認する。

鉛色の弾頭を覗かせた９ｍｍパラベラム弾がランタンの光を反射して鈍く光った。暴力の力を秘めた鉄が、静かにその存在を誇示するのを見て満足した青年はマガジンをＭＰ５に叩き込む。

そして、チャージングハンドルを引いてチェンバーに初弾を装填、無機質な音を立てて薬室へと弾丸が送り込まれ、各部がしっかりとかみ合った機械音が鳴り響く。青年は指でセレクターを弾き、セーフティーから単射へと変更した。

後は、引き金を絞るだけで鉄の暴威は、正確に音よりも早く飛翔する。

「行くか、カノン」

言いつつ扉に手を掛けた青年へ、犬は小さく吠えて答えた。

静かに扉が開かれ、斜陽の光が差し込んでくる。目を焼く淡い光に双眸を細ませながら、青年は腐肉が焼ける気味の悪い臭いの漂う駐車場へと降り立った。

嫌な臭いはするものの、動く影は他にはない。時折、扉の閉じた車両の中で、何かが反抗するように窓を殴る姿が見える程度だ。

出来るだけ足音を立てぬよう体重移動に気をつけながら青年は足を踏み出した。目指すのは給油スタンドだ。燃料にまだまだ余裕はあるが、補充できるのなら出来る時にして置いた方が良い。

それに、空のジェリ缶が二つあるので、その中身を満たしておきたかった。蓄えは出来るだけ沢山欲しい。例え欲深と言われようとも。

静かな駐車場を歩くが……何も居ない。ただ、自分と、その傍らを爪が地面に当たる小さな足音を立てながら歩くカノンが居るだけ

だ。

スタンドの中は全く無人であった。車を乗り入れるスペースにも、様々な商品を置いた建屋にも誰も居ない。

しかし、それでも青年は気を緩めること無く歩を進め、一番手近にあるスタンドの給油機へと近づいた。運転手自身が操作し、給油し終わった後に料金を支払う、何処にでもあるセルフサービス型の給油機だ。

青年はその給油機を見て小さく舌打ちをした。こうなってから既にかなりの時間が経っており、電気の供給が止まって久しい。この型の給油機では、電気が無ければ幾らレバーを引いてもノズルからガソリンは出てこない。

恐らく、地下に備えられているであろうタンクへ行けば直に吸い上げられるかもしれないが……。

これが災害時対応用のガソリンスタンドであったならばなと、青年は舌打ちを我慢しながら、今度は土産屋や食堂が入った建物へと足を向けた。

だが、やはり自動ドアも動かず、目に見える場所にノブで開くドアは無かった。恐らく裏口に回ればあるのだろうが、そちらには鍵が掛かっているだろう。

あまり大きな音を立てたくは無いが……仕方ないか、と青年は溜息を一つ零した後で、ある物の方へと向かった。

灰皿だ。スタンド型の灰皿で、上には水をため込み、そこに吸い

殻を捨てるようになっている、良くある型の灰皿であった。

青年は灰皿の横に立つと、おもむろに灰皿を持ち上げ……自動ドアへと放り投げた。

灰皿が頭からドアへと突っ込み、自動ドアの硝子が弾けて割れた。硝子の割れる嫌な音が響き、硝子が割れたサッシの間には大穴が産まれた。新しい入り口だ。

マチェットで縁の硝子を払い、自分が先に中へと進入して足先で散らばった硝子を蹴散らす。カノンへの配慮であったが、カノンは何て事無いと言わんばかりに砕けた硝子を踏み越えて青年へと並ぶ。長い間外で暮らした彼女の肉球は、硝子すら通さぬほどに硬化していたのだ。

さもあらん、犬は元々狼が家畜化された物だ。彼等は本来、外の山や荒野で生きていた種族である。小さな鋭い石等を践む度に出血してはやっていられまい。

青年がカノンを見下ろすと、勇猛な雌犬は、何かあったのかと問うような瞳で見上げてきた。

それに青年は何も言わず、視線を前に戻して硝子を踏み散らしながら前に出た……。

建物の中は明かりが消えていて、日の光が斜めに差し込む以外の光源は存在せず、非常に薄暗かった。

自分が入った入り口の向かいに土産屋があり、その奥に食堂がある。青年は迷わず土産屋へと向かった。

食堂にはろくな物は無いだろうと見たからだ。冷凍食品などを解凍して提供するのだろうが、電気が止まっているので冷蔵庫の中身も当然手遅れだろう。缶詰でもあれば御の字と言うところだが。

その分土産屋には生物以外ならまだ食べられそうなものが多分にある。土産としてよくある、こじつけのようなネーミングの菓子や、真空パックの食品などが残っているはずだ。

予想通り、さして広くない店舗の棚には、土産物である菓子が山ほど残っていた。大抵は半年以上経っていても持つ物ばかりで、青年は適当に腹を満たせそうな菓子を物色して手近にあった買い物籠へと放り込んでいく。

よく分からない饅頭や、甘ったるそうなゴーフレットに妙ちくりんな煎餅等のような色物ばかりだが、今は胃に入って消化でき、栄養に出来るだけで十分すぎるほど貴重だ。

ただ、生物を保存していたであろうフリーザーの辺りには近寄りたくない。カノンは決してその方に鼻面を向けず、青年ですら辟易するほどの腐敗臭が漂っていたからだ。

この鼻を刺激する不快な香りは、恐らく魚などの生物が腐敗した臭いだろう。人間が腐ったのとはまた趣の違う腐臭がした。

サービスエリアにある土産屋特有の雑多さを楽しみながら棚の間を彷徨いて食料を集める。また、コンビニを兼ねていることも多い土産屋にはドリンクコーナーもあり、保存食料ばかりで華の無い食生活に彩りを添えるソフトドリンクも残っていた。

ペットボトルや缶に入っていれば数ヶ月程度では劣化しないし、万一賞味期限が切れていても未開封なら後半年は行けると、青年は経験から分かっていた。

某国での国民飲料的扱いを受ける炭酸飲料や、薄めて飲む飲料を最初から薄めてボトルに詰めた乳酸飲料。他にはサイダーやオレンジジュースなど、適当に籠に詰め込んで廻ると、次第に運ぶのがおっくうな重さになり始めていた。

欲張りすぎは良くないが、後何往復かして飲料程度は確保して置いた方が良いだろうか。

しかし、武器を持って金も持たずに籠に荷物を詰めていると、ちょっとした強盗のような気分にさせられるなと、青年は飲料を物色しながら少し愉快な気分になった。

だが、そのおかしみは直ぐに打ち消される。カノンの小さな鳴き声によってだ。

普段は鳴かないように言い聞かせているカノンが鳴いたということは……。

青年は咄嗟に籠を下に置き、スリングで背の方へと廻っているＭＰ５より抜きやすい位置にあるＭ３６０を素早く抜き放ち、カノンが居る方へと身を回した。

低いうなり声を上げて警戒するカノンの目線の先に、一体の死体が居た。それの位置は食堂の奥であり、影に隠れていた。

まだ遠いので青年には気づけなかったのだ。どうやら、アレだけ

が出てきていると言う事は、此処にいた死体は駐車場にてフランベされた物で殆ど全てだったのだろう。

青年はまだ余裕がある事をみてＭ３６０をホルスターへと戻し、ＭＰ５を手に取った。距離は二〇メートル近いので拳銃で狙う距離では無いからだ。

素早く肩付けに構え、サイトを覗き込む。狙うのは頭だ。連中は足をもごうが、腕をちぎろうが止まること無く向かってくる。腹から下を失っても何の問題も無く、臓物を撒き散らしながら這いずり続ける。

連中の中枢は頭だ。それも、恐らく脳か脳幹であろう。そこを潰さない限り連中は首だけになっても動き続けるはずだ。

サイトの向こうに見えるのは、距離を除いたとしても小さな体躯であった。身長約一二〇センチ足らず……子供だ。顔は腐り、肉が削げて鼻が無く、眼窩は既に暗い穴が無謬の闇を湛えているだけへとなっているが、それは確かに子供だった。

身に纏ったシャツと半ズボンから、恐らくは少年だろう。髪までも殆ど頭皮ごと腐り落ちているので、それくらいでしか性別が判断できなくなっていた。

ふと見れば首の辺りが酷く損壊している。恐らく、捕まって喰われて……同じようになってしまったのだろう。

哀れだと思いつつも、青年が示したのは慈悲の抱擁でも悲しみの涙でも無く、単なる敵意であった。サイトの中央に額を捉えると、そのままトリガーガードに添えてあった指をトリガーへと運び、迷

い無く絞る。

何とも間抜けな、圧搾した空気が漏れる音が一回響き、サイトから見えるマズルフラッシュの輝きのその向こうで少年の、否、死体の頭が、がくりと弾けるように後退した。　９ｍｍの弾丸が、狙ったとおりにしっかりと飛翔して額を砕き、その後頭部から腐れた脳漿をしっかりとぶちまけたのだろう。死体はそのまま仰向けに倒れ、数度痙攣した後に完全に動かなくなった。

死体が倒れる音と、薬莢が床に転がるのは殆ど同時で、鈍い音と甲高い金属音が同時に青年の耳朶を打った。どちらも……あまりにも空しい反響だった。

数秒間死体を凝視して、もう動かない事を認識すると、青年は銃を下ろして薬莢を拾った。

薬莢を神経質に拾ったり、車上で撃っても投げ捨てずに天窓へと放り込むのには理由があった。薬莢には再び雷管を付け直して火薬を詰め、弾頭を装備すればまた撃てるからだ。

日本では薬莢の管理もしっかりするように猟銃のマニュアルには書いてあり、ハンドロードするための機材も売ってある。再利用した方がコストも掛からないし、青年としても数が多くあったとしても、出来るだけ大切に使っていきたかった。

火薬滓で濁った薬莢を眺めながら、青年は小さく溜息をついた後で、唸るのをやめて静かに押し黙ったカノンへと目を向ける。そして言った。

「適当に回収したら、夕飯にするか」

それに答えるようにカノンは小さく鳴き、青年は銃を肩にかけ直し、籠を手にした。

もう、何も考える事は無いと、自分に言い聞かせながら食料で満杯の籠を片手に青年は表に出る。

日はもう殆ど完全に陰って山の稜線を淡くオレンジの光で染めるだけになり、ほの白く注ぐ月の光が駐車場をうっすらと照らしている。

それ以外に光源は無いので、かなり暗い……青年はマガジンポケットの隙間へとねじ込んでいたハンディライトへと手を伸ばしつつ、空へ顔を向けた。

上では、ほの白い貌を覗かせる夜の女王がビロウドの舞台に座し、その周囲を取り巻きの数少ない従者達がちらちらと輝いている。明かりがかなり減ったので星がよく見えるようになったなと思いつつ……青年はライトを付けてキャンピングカーへと歩を向ける。

「カノン、今晩は何味がいい？」

ただ、空に鎮座する女王が、地上にて這いずる彼等を嘲笑うかの如く、静かに輝き続けていた……。

青年と犬と、無線通信機（後書き）

と、言う訳で間が空きましたが三話です。遅筆な上に忙しいので、ちまちまとしか投稿出来なくて申し訳ありません。

それと、感想ありがとうございます。色々と直さないと行けないところがあることが分かりますし、役に立ちます。近い内に返信もしたいので、暫しお待ち下さい。

無線機とアンテナと暇人を（前書き）

今回はグロはありません。でも、大した動きもありません。

……何時ものことか

無線機とアンテナと暇人を

さして広くも無い部屋があった。

光源は机上に置かれたライトスタンドだけという非常に薄暗い部屋で、部屋の側面には入り口と平行して大きな窓があるのだが、それには暗色の遮光カーテンが掛けられていて、外からの光も全く入ってこない。

また、狭い部屋を圧迫するように棚が部屋をくまなく囲っていた。縦に長い六畳ほどの部屋の入り口側を右側面とすると、後ろの壁と左の壁に背の大きな書類棚が並んでおり、それらには無数の書類が詰め込まれている。

そして、残った正面には古ぼけたスチールデスクがあり、更にその上には無数の機材が雑然と並べられていた。縦に積み上げられた三台のブラウン管テレビと、巨大な無線通信機……。

アマチュア無線機と呼ぶには本格的過ぎる機材にはアンテナが無く、その代わりに結束バンドで束ねられた無数の太いコードが小さな天井の穴から外へと伸びていた。

そのコードを辿っていけば、建物の外壁を通って屋上へと達していることが分かるだろう。そこには巨大な、元からあったとは思えない、巨大で粗雑なアンテナが無理矢理打ち付けられ、冷たい風に吹かれながらそびえている。

屋上から望めるのは広い駐車場だった。車が幾台も放置され、人気は一切無い。そして、縁より見下ろせば眺められるのは明かりを

失った電光看板だ。

不自然なまでに巨大なアンテナを屋上から生やした建物は、三階建ての巨大なショッピングセンターであった。一階には大きなホームセンター、二階には広大な食品売り場を持つスーパー。そして、三階には三つの家電量販店が入った非常に大きな複合販売店だ。

露天駐車場には二〇〇台以上の車を飲み込むことが出来る巨大な店舗。その店舗の側には大きな建物は無く、転々と民家や広大な田圃が広がっている。

都会の中に出来た空隙のような土地にそびえる建物。屋上より望む風景の遙か遠くには複合大学と列車の駐車場を望むことが出来る。

複雑な立地故に成り立った、中途半端に寂れた街の流通を維持する巨大な店舗は、今はその機能の殆ど全てを失って、また新たな役割を得ていた。

現在この建物には大勢の人間が詰め込まれている。死人が人を襲うようになったあの日から、生き延びる為に逃げ込んで、立て籠もった人々だ。

最初に逃げ込んだ十数人から、新たに逃げ込んできた避難民を抱き込んで、シェルターと化した店舗の居住者は二〇〇を上回り、現在は店舗の中を無理に改造して生活している。

水や電気が供給されなくなって久しく、今彼等は店内の物資を使って生活をしていた。ホームセンターや食料品店があるので食料や飲料に事欠くことも無く、発電機やガスコンロ等も足りているから、数ヶ月は生活に困窮することも無かった。

だが、半年以上が経った今、常況は立て籠もり始めた頃から大きく変わっていた。

彼等は元々、この事態が国によって、さして時間が掛からずに解決されると目論んで立て籠もっていたのだ。それ故に、食料は長くて半年で出られると見て配給制限を掛けていた。

それが現在、四月に事態が始まって十二月である。当然、中の人々は半年でどうにかなりそうにないと途中で感づき、食糧配給はゆっくりになったが、時は既に遅く、その配給制限も後の祭りであった。

今すぐに枯渇すると言うほど困窮している訳では無いが、現代的な生活に慣れた人々に一日二食で、満腹には到底なり得ない食事は酷い苦痛であろう。

また、当初は国が事態を解決すると誰もが思っていたので、コミュニティの中でも理性的な行動を取る者が多かったのだが、現在となっては国家が事態を収拾できる以前に、政府が残っているかどうかすら疑わしい。

そうなると、どうなるであろうか。

閉鎖的で狭いスペースに押し込まれ、満足とも言えぬ食事しか与えられないというストレスが、法や刑罰の枷によって押し込められていたが……その枷が、外されると言う事だ。

現在は自治をしようという一団が武器の管理と食料庫の警備を担っているので、危ういところで避難所の治安は保たれているが、そ

れも限界が近い。

そんな、悲惨な未来が少しずつ見え始めた脆い避難所の屋上で、真冬の薄ら寒い空の中天にて控えめに輝く陽に照らされて、一人の女がフェンスの外れた縁の一角に腰を降ろして外を眺めていた。片手には軍用と思しきオリーブグリーンの双眼鏡が握られている。

「ん～、増えてるにゃあ」

口から零れたのは明るく、軽い調子の声だ。声の持ち主は、声の雰囲気とは似合わぬ容姿をしていた。いや、そう言っては語弊があるだろうか。

すらりと伸びるバランスの良い長身。黒いカーゴパンツに覆われた発達した氈鹿のようなしなやかな足に、真っ赤なタンクトップシャツの下からでも存在をうかがわせるうっすらと割れた腹筋。腕にもたるみという様な物は無く、しっかりと引き締まっていた。

その鍛え上げられた体はフェンスと対比すると、１８０ｃｍ程はあろうかという女性らしくない長身だ。

が、恐ろしいのはそれほどの長身を誇りながらも、しっかりと胸が発達していることだ。下着のサポートも無しに、タンクトップに包まれた胸部はしっかりと存在を主張している。

まるで外国の女軍人かハリウッドスターもかくやと言った風体だが、その体の上に乗る顔はと言うと、どちらかと言うとあどけない印象を受ける。

緩くつり上がった猫目と、それを彩る緩い弧を描く眉に、鼻筋は

はっきりとしているものの小さい鼻。唇は小ぶりで、パーツそのものは全て整っているが、どこか幼い印象を受ける。

その印象の理由は、顔に貼り付けた緩い笑みであろう。何がおかしいのかは分からないが、常に笑みを顔に張り付かせ、遠くを見つめている。

不意に、一陣の風が吹き、女性の長い髪が巻き上げられた。薄い栗毛の髪は乱雑に切られたせいか毛先がちぐはぐで、量が多くボリュームのあるシルエットから見る者に犬の毛並みを彷彿させる。

近寄って見れば分かることだろうが、この髪は染めた物では無い。その証拠に毛の根元から全てが綺麗な栗色で、髪染めなど出来ようも無い此処ではあり得ないものだかったからだ。

局所を見れば彼女の調子は酷くちぐはぐだが、改めて全体を観察すれば、その本来かみ合わないパーツ達が精緻なバランスで組み合わさり、活発で健康的な美を醸し出していた。

「おおうっ、さびい……」

女性は風に撫でられた体を抱きかかえ、一度身を大きく震わせた。運動して？いた汗が風で冷やされ、体が冷え始めている。

いそいそと傍らに重しを乗せて置いてあった真っ黒いフライトジャケットを取り上げ、それを着込んで前を深く合わせた。外されたフェンスに立てかけられたジャケットの重しにしていた黒い鉄が、鈍い音を立てる。

先ほどまでジャケットの重しに使われていたそれは、プラスチッ

クと鉄の混合物……Ｍ４カービンライフルであった。米軍の一部部隊が愛用するカービンライフルで、伸縮ストックや広い拡張性を与えるマウントレイルが特徴だ。

そのＭ４には中・近距離用のスコープがマウントされ、アンダーレイルにフォアグリップとライトが装備されており、サイドレイルにはレーザーポインターまで設けられていた。

どう見てもショッピングセンターの備品ではないが、それを女は何て事もなさげに扱い、ジャケットを羽織ると自然に抱きかかえた。

「んん、しっかし、どうしたもんだかねぇ……」

「何かあったのか？」

屋上で黄昏れるように冷えた空を眺める女に、遠くから声が掛けられた。それに反応して振り返ると、下へと続く階段がある小部屋の扉の前に一人の男が立っていた。

年の頃は四〇の半ばと思しき男性で、角張った厳めしい顔をした中年の男だ。その身に纏うのは、自衛隊員がの迷彩服であった。腰元にはホルスターで９ｍｍ機関拳銃がぶら下げられていることから、通常の陸戦隊員ではないのであろう。

「おお、おやっさん。ちっと体動かしてただけだよ」

「なら構わんがな。様子はどうだ」

「あー……増えてる。近いうちに掃除しないとまずいかもねー」

暢気に言いながら女は視線を前に戻し、屋上の向こう……高いフェンスで阻まれた向こうを見た。

フェンスで囲まれた駐車場には入り口が二つ設けられていて、そこには本来簡単な入場門と駐車券発行機が置かれているのだが、現在は道を塞ぐように車がバリケードのように他の板などと組み合わせて置かれていた。

そして、そのバリケードやフェンスに群がる影がある……歩き回る死者達だ。意味の無い呻き声を上げながら、ただ単調にバリケードやフェンスに拳を叩きつけている。

強化されたフェンスや、堅牢なバリケードはただ殴っただけでは壊れず、殴る度に死体達の肉が削げ、骨が折れるだけだ。だが、それでも彼等は諦めること無く叩き続ける……。

「流石にここまで多くなるとねぇ。一応バリケードもフェンスもかなり強化してるから今すぐどうこうって事にはならないだろうけど……如何せん、雨だれが岩を穿つことだってあるし」

「壊れても修理は出来るし、その為の資材はまだまだあるが……一度壊れて進入されるとコトだからな」

女の背後にまでやってきていた壮年の自衛隊員は、現有戦力で対処できるかどうか、と辛そうにはき出してから首を振った。

「まぁ、その時はその時だよ、おやっさん。死ぬ時は何してたって死ぬしねぇ」

硬い髭が生えた疲労も色濃い四角い顔に、女は満面の笑みを浮か

べていった。その目に曇りは無く、この台詞が皮肉や諦めから吐かれている物で無いことを雄弁に語っていた。

それを見て、男は一瞬軽く身を引きかけ、それを意志で制した。これまで辛い訓練を積んできたであろう男であっても、この女が吐いた台詞は何とも異質な物であった。あまりにも、達観し過ぎている……本当に、17歳の高校生が、極限状態で言える言葉なのだろうか。

「……お前、本当に十代か？」

「ええっ、おやさんまで酷いっ！？　みんなして名無し氏みたいな事言うっ！」

憤懣やるかたないと言うように頬を膨らませる様は、確かに体格を除けば年相応と言っても良いだろう。女……いや、少女はその身に余るであろうライフルを抱えながら不機嫌そうな視線を男へと注いだ。

男はそれに何も応えられず、後頭部を幾度か掻きむしって困ったような表情を作る。掻き毟った後頭部から、雪のように雲脂が飛び散り、女が叫んだ。

「うわぁっ！？　汚いよおやっさん！！　女の子の前なんだからさぁっ！！」

「ん、おお、スマン。何かお前が女って気がしなくてな……」

「……どーいう意味？」

笑いながら握り拳を掲げる女に、男は少しだけ笑いを取り戻す。そして、胸の前に諸手を挙げて降参の意を示しながら戯けて見せた。

「つってもなぁ、そのカービン使ってるとはいえ、一〇〇メートル先の死体のドタマ吹っ飛ばされるとなぁ……ＷＡＣでもそこまで出来る奴ぁそんなにいないぞ」

おかしむようとも、呆れたとも取れる調子の言葉に、少女は誇らしげにライフルを抱えた。そして、華が咲くような笑みを浮かべてみせる。

「これでも十歳の頃からエアライフルを嗜んでおりますから」

「……エアライフルと本物を同列に語られてもな」

「狙って撃って当てる、やってることは一緒だよ。ただ、それがプラスチックのターゲットか動く肉かどうかってだけでさ」

こともなげに言うが、一〇〇メートルも離れた先の、しかも不安定に揺れる死体の頭をライフルで穿つのは至難の業であろう。だが、それをこの少女は簡単だとあっさり言ってのける……これが正規の部下だったらな、と男はまた頭を？こうとした。

が、頭を？くと雲脂が飛び散って怒られるなと腕を降ろそうとして、ふと時計が目に入った。地味な銀色の本体の時計の文字盤上にて踊る二本の針は、そろそろ正午を示そうとしている。

「なぁ、いいのか、そろそろ昼だぞ」

男のその言葉を聞いて、少女は文字通り身を跳ね上げた。ともす

れば屋上から転落しかねない勢いで身を持ち上げ、ライフルのスリングを肩に通し、急いで背に回しながら叫んだ。

「うぇっ！？　マジっ！？　やばっ、ちょっと警備室戻ってるよっ！！　待ってて名無し氏ーっ！！」

そして、脱兎の如く凄まじい勢いで駆けだした。男は頭の片隅で一〇〇メートル十秒台にはなるかな……等と考えながら、振り返ること無く下へと続く扉に向っていく背中を見送った。

乱暴に開かれて、叩きつけるように閉じられた鉄扉が立てる抗議するかのような耳障りな音に耳を苛まれつつ、男は煙草を懐から出した。何処にでもある普通の煙草で、避難所内で手軽に手に入るストレス発散道具だ。臭いだの煙たいだのと日頃から騒ぐ少女の手前我慢していたが、居ない今ならどうしようと自分の勝手だ。

自分の隊が混乱で本隊から離れ、少数の部下とたどり着いた此処だが、実際に自分たちが守りの要になっていることを男性は理解していた。戦闘経験があり、技術を持っている人間なんぞ、日本には彼等くらいしか居ないのだから当然であろう。

だが、自分達は結局彼等の日常を守る事が出来なかったと、軽く歯がみをしながら、男は咥えた煙草に百円ライターで火を灯した。紫煙がくすぶり、苦味が口腔内に広がり、薫り高い煙が肺へと取り込まれる。

それで誹りを受けることは未だに多く、真実なのだから甘んじて受け入れよう。だが、せめてここだけは護りたいと男は思っていた。避難所には女子供、老人も多く居り、自分の役目は彼等を護る事だったのだから。

だが、長い圧迫と持続して解放されないストレスが中の雰囲気を悪くし、少しずつ足りなくなっていく食料が不安を煽る……。

最初は避難所を警備する為に編成した戦える大人を集めた部隊も、保守的な人間の方が多かったのは過去のことで、少しずつ血気盛んな青年達に煽られて食料を確保する為に表に出ようという機運が高くなっている。

確かに何時までもここに引きこもっては居られないだろう。要塞化して拠点にするのに何の異論も無いが、いずれ食料は無くなってしまう。何時か必ず、外に出て食料を集めなければならなくなるだろう。

発電機を動かす為の燃料も、駐車場の車から取って賄ったりしているが、その残りはもう殆ど無いし、人間が生きていく上で絶対必要な水も足りなくなってきている。

屋上には幾つもの盥や漏斗を口に嵌めたペットボトルが置かれているが、ここ一月ほどは全然雨が降らない。水の安定した供給が無く、貯蔵も少ないというのは死活問題だ。

しかし、まだ早いと男は見ていた。

青年達は近くで放置されている警察車両から少量の火器を拾えて気が大きくなり、何でも出来ると考えているが、アレ等と実際に間近で交戦した男からすると、拳銃だけでは心許ない等と言う話ではない。

完全武装で小銃まで持った自分たちでさえ、連中の対処には酷く

手間取らされた。撃たれながらも前に向かってくる上に、ふらふら動き的が定まり憎い頭を潰さないと連中を無効化する事は出来ない。

おまけに、殺傷力を低めるという理由で拳銃にも小銃にも大抵はホローポイント弾ではなく、フルメタルジャケット弾が装填されているというのも、死体相手の戦闘難度を上げていた。

如何せん、フルメタルジャケットは硬い物を穿つ為に使われる弾丸だ。防弾装備をしていない連中を撃っても、容易く貫通してしまう。これが、体内で潰れて破壊力を増すホローポイント弾であるのならば、当たった時の威力も素晴らしいので足止めにもなるが、貫通しては標的を押す力には乏しい。人間相手であれば、弾が貫通した苦痛で倒れる事が望めるが……連中は痛みを感じない。

そんな物を、効果の薄い弾を装填した拳銃やら、簡単な武装だけをしたロクに訓練もしていない連中が、バリケードも無しに相手をすれば、どうなるかは火を見るよりも明らかだ。囲まれ、武器が尽き、櫛の歯が欠けるように少しずつ殺されていくだろう。

だから、せめて連携して動く訓練をし、連中の攻撃にも耐えられる車を用意する事程度はしていなければならない。そして、出来る事ならば連中に対して有効な戦術も見つけ出すべきだ。

今のところは、一対三で事に当たり、一人がさすまたで敵を転倒させ、一人が棒で抑え、残った一人が鈍器で頭を潰すという戦法をとらせているが……これは、確実で安全だろうが、全方位から敵が大量に押し寄せる外では通用しないだろう。

故に、それらの問題点を全てクリアしてから物品を外に探しに行くべきなのだ。頼りなくなってきたとはいえ、まだ食料が尽きた訳

では無いし、雨だっていつかは降るはずだ。

だが、若い者達はそんな事を聞きはしない。幾ら戦闘訓練を受けたプロの自分達が口をすっぱくして言っても、彼等からすれば自分達自衛隊は“役割を果たせなかった役立たず”なのだから。今は、それを真っ向から否定できない自分が歯がゆい。

それでも、諦める訳にはいかない。このまま諦めて若者達を好きにすれば、大勢の死人が出る。彼等が外で死んで防衛戦力が落ちれば、バリケードが壊れた時に防ぎきれずに突入される危険性が増し、また、下手をすれば外に出る為にバリケードを開いた時にやられることだって予測できる。

まだ早いのだ……早すぎるのだ。しかし、血気にはやる若者達は自分達の言葉に耳を傾けてはくれない。諦めはしないが……望みは薄いだろう。

煙を吐き出しながら、男は今頃下の警備室でアマチュア無線機をいじくっているであろう少女の顔を思い出した。せめて、あれくらいの力量がある人間が自分達以外に何人かいれば、事態はもう少しマシになったかもしれないのになと。

長距離の立位で行うライフル射撃は、女性の安定した骨格の方が向いているとはいえ、あの少女はかなりの腕前だ。移動目標に一〇〇メートルも離れた場所から弾を当てるなど、至難の業だろう。しかも、フルオートで弾をばらまいてならまだしも、単射での一射一殺だ。その腕前は見事と言わざるを得ない。

そして、あの少女が飽きもせずしきりに話題に出してくる青年……名前を教えて貰っていないので彼女は彼の事を“名無し氏”と呼

んでいるが、その名無し氏は車で移動しながら生活しているらしい。

こんな状況下で車上生活の上、街をぶらついて物資を集めるとは中々のサバイバビリティだと関心させられる。それに、聞くところによれば射撃の技術もあるようだ。そんな人物が頑丈な車と一緒にここへ来てくれれば、どれほど心強い物であろうか……。

だが、少女が言うには、彼も一人で一杯一杯だと言い、此処に来てくれる可能性は殆ど無いらしい。望み薄な期待だが、彼女はまだ諦めていないようだ……それでも、少なくとも自分は外部の人間に過剰に期待を寄せるべきではないだろう。焦りで血が上って前が見えてない奴が多いのだ、せめて自分くらいは冷静でいなければ。

しかし、冷静に考え、何とかしなければなとは思うが、明確なプランは無い。血気に盛る若者を諌める方法も、上手く外で物資を探す方法も……男には全く思いつかなかった。

結局、士官だの幹部だのと言っても出来る事はこの程度だと、自嘲気味に顔をゆがめながら、かなり短くなった煙草の最後の一口を深く吸い込んだ。

紫煙が喉を燻し、肺に重い物を残してはき出され、肺より回された煙が血液に乗って脳に達し、少しずつ思考を鈍化させていく。今は、この酸欠による思考力低下が何よりも愛おしい慰撫だった。自衛隊に入ってからはやめていたが……今はこうでもしないとストレスが発散できない。

恋人が居る連中は日頃人の少ない物陰で飽きる事を知らぬというように盛っているが、独り身には辛い環境だ。ストレス発散は、暴れるか異性との肉体的接触が一番手軽だというのに。

答えの見つからない思考を続け、その内考えがループしている事に気付いた男は、諦めたように頭を掻きむしってからすっかり短くなった煙草を屋上から放り捨て、新しい一本をパッケージから取りだした……。

アンテナから伸びるコードを辿ればたどり着く警備室は、元々は深夜に警備員が一人で詰める小さい場所だ。ここは裏口の警備を目的に設けられた場所なので規模は小さい。ショッピングセンター全体を管理する、もっと大きな警備室が三階にはあるのだが、そこは自警団の本部になっているので少女のテリトリーではなかった。

手狭は警備室は、蛍光灯の明かりに照らされて、その雑多な様相を露わにしていた。リノリウムの床には足の踏み場も無いと思うほど様々な物が散乱している。この部屋は警備室であると同時に、無線機を置いた少女の部屋だったのだ。年頃の少女であることと、特殊な技能を有していることから少女はこのコミュニティ内で優遇されて一人部屋を与えられている。主にこの部屋で少女が行うことは、有線で無理矢理増設した駐車場のバリケードの監視と、無線で外と連絡を取ることだ。

有線の監視カメラは元々電化製品売り場のパソコン周辺機器の棚で手に入れたＷｅｂカメラで、強引にコードを繋いでここに引いたのだ。少女は半日近くここに籠もって監視カメラを眺めながら無線で生存者を探す仕事をしている。それがコミュニティに所属することによって与えられた役割なのだ。

それ故に、狭くて物だらけだが、ここは少女の領域であり、小さい要塞なのだった。

が、手狭な部屋は御世辞にも綺麗とは言えなかった。灯りが落ちていたときは暗くて床は見えなかったが、灯りが付くことによって部屋の惨状が明るみになった。

中央に一番スペースを占領している薄汚れたシュラフの周囲に食べ終わった缶詰やカップラーメンの後や、読み古された雑誌や漫画が散乱し、その合間にパラパラと空薬莢やゴミが放置されている。

とてもでは無いが、年頃の少女が生活するスペースだとは思えなかった。どちらかというと、その部屋の様相は下宿生活で堕落しきった男子大学生のそれだ。

窓を開けると危ないからという理由でろくすっぽ換気されていない部屋の空気はこごっていて、かなり過ごし辛そうだが、椅子に座って無線機を操作しながら部屋の主である少女は何にも気にしては居なかった。つまみを回して周波数を調整し、普段の周波に合わせた。時間が時間だ、そろそろ無線機が繋がった屋上のアンテナに電波が引っかかり、通信が聞こえてくる事だろう。

アマチュア無線機は、アンテナさえあれば最後のマイクロチップまでが消滅した世界でさえ通信を可能とする、最後にして最も堅牢

で確実な通信手段だ。昔にそんな話しを聞いてから、少女は手慰みの趣味として無線を自作したりしていた。

屋上のアンテナも、ショッピングセンターの資材を使って作った自作の物だ。大きかったのでかなり手間だったが、自警団の人たちに外と連絡を取る為の物だと話すと快く手伝ってくれた。今屋上に鎮座しているアンテナのおかげで、かなり遠くから飛んでくる電波でも受信できている。

しかし、通信は殆ど入らない。偶に通常無線で離している自衛隊員同士の会話が混信してくるが、それは個人無線を用いた部隊同士の連絡だ。基地同士での無線には何か傍受できないように細工が為されているのか聞けた事は無い。

無作為に助けを求める無線を放出することもあるが、一切のレスポンスが無い事を鑑みると、自衛隊も自分達を助けに来る余力などもう無いのだろう。絶対に傍受は出来ているはずだろうが、反応が無いというのはそういう事だろう。

色々と大変だにゃぁ、と他人事のように、何とも間抜けた独り言を吐き出しながら、少女は椅子を思いっきり背後に傾けた。机の下部で突っ張らせた足が外れたら、そのまま少女は背後のゴミ溜めへと倒れ込む事になるだろう。

「はーやくかけてこないかなーっと」

ぎこぎこと椅子を動かしながら、少女は呟いた。ただ、猫のように大きな目を楽しそうにたわめながら……。

無線機とアンテナと暇人を（後書き）

投稿間隔が遅くて申し訳ない……色々と忙しくて

まだ続きますが、そんなに目だった動きは直ぐには無いと思います。

あと、近い内にまた別の没を食らったネタを放り投げようと思います。今流行のネットゲーム物ですが、何故か当時は受けが悪かったなぁ……。

最後になりましたが、今年もよろしくおねがいします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5747z/

青年と犬と、もう一人

2012年1月11日01時00分発行